六訂 女子國語讀本 巻四

375.9
Yo19
資料室

42207
教科書文庫
4
810
42-1925
20003
01735

資料室
375.9
Y019

大正十四年二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

吉田彌平　篠田利英
小島政吉　岡田正美　共編

六訂 女子國語讀本 卷四

廣島大學圖書
廣島高等女學校圖書
廣島大學教育學部圖書
19633

金港堂書籍株式會社

目次

一　バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下……溝口白羊　一
二　千代女……一四
三　朝顔……一九
四　筑紫の秋……吉田紘二郎　二〇
五　故郷……正岡子規　三〇
六　紅葉の便り……佐々木信綱　三五
七　湖畔の秋……大和田建樹　三六
八　嫩草山……德富健次郎　四四

一九　鶴が城……大類伸　四九
二〇　皇室に關する敬語……　五三
二一　紐育……　五七
二二　金米糖の壺……柴田鳩翁　六五
二三　苦樂……德川光圀　六八
二四　冬……德富健次郎　六九
二五　初日影……武島羽衣　七一
二六　緣起……關根正直　七五
二七　豐臣太閤の文事……三上參次　八〇
二八　茶僧利休……堀秀成　八九
二九　牧場の曉……杉村廣太郎　九三

三〇　牧神の笛……三木羅風　九八
三一　四季の月……石川依平　一〇〇
三二　二宮尊德の訓言……福住正兄　一〇一
三三　わが袖の記……高山樗牛　一〇六
三四　人間の三等……福澤諭吉　一一〇
三五　旅順口閉塞……　一一五
三六　極地の探檢……　一一九
三七　夜半の時雨……　一三〇
三八　砂丘……吉江孤雁　一三三
三九　春が來た……永井荷風　一四七
三〇　初雛を贈る……樋口一葉　一五七

三一　女子の同情……芳賀矢一　一五九
○三二　根分の後の母子草……瀧澤馬琴　一六一

帝國大學圖書之印

六訂

女子國語讀本卷四

一　バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下

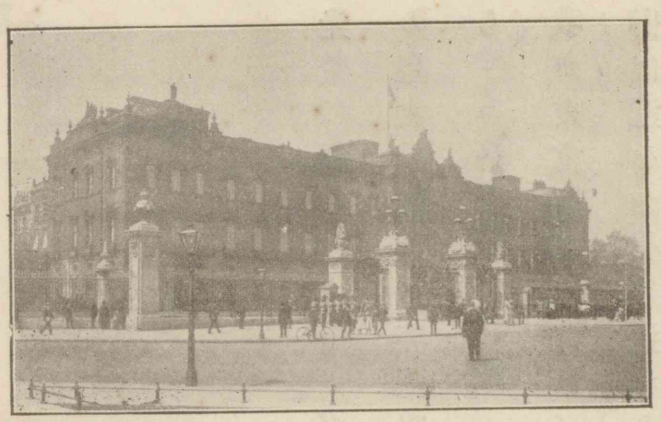
溝口白羊[一]

光榮に輝くバッキンガム宮殿。[二]其の宮殿こそは實に日東の皇太子殿下が英國皇室の賓客として、意義ある三日[三]を送らせられる晴の宮殿であつた。

我が東宮殿下にはヴィクトリヤ停車場で英國皇帝陛下の御出迎をお受け遊ばして、それから御料の御馬車に御同乘の上、公式の鹵簿でバッキンガム宮殿に入らせられると、豫

(一) 名は駒造。文學者。
(二) 倫敦に在る英國の宮殿。一七七五年建造。
(三) 大正十年五月九日より十一日まで。

め宮殿内に殿下の御來着をお待受け遊ばされた英國皇后陛下は、メリー内親王殿下と共に、殿内弓の間に殿下をお迎へ遊ばされて、色々長途の御旅行をお犒ひのお言葉があつた。



バッキンガム宮殿

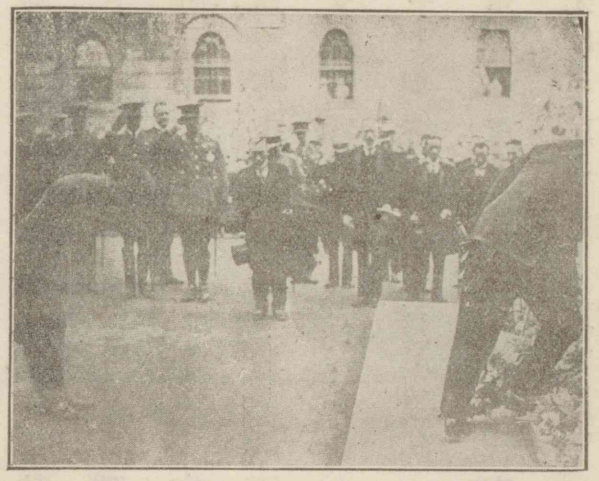
此の時我が皇太子殿下は、改めて英國皇帝陛下にも御對顔遊ばされ、各供奉員扈從列立の席に於て、天皇陛下よりの御親書並に金銀製美術品、本邦特産の織物などを兩陛下に御贈進あらせられ、兩陛下より我が天皇・皇后陛下の御近情並に宮廷の御事に就いて種々御懇切なる御尋があつた後、我が皇太子殿下は英國兩陛下並に皇太子殿下と御晝餐を共に遊ばされ、御旅疲れを御休めの間も無く、引續き皇太后アレキサンドラ陛下を御訪問になつた上、午後四時三十分、バッキンガムの宮殿を御出門遊ばされた。

斯くて東宮・閑院宮の兩殿下を乘せ奉つた自動車が熱誠なる拜觀者を以て滿たされた沿道の町々を通つてホワイト、ホール街の戰*死者招魂碑の前に到着した時は、提督・將軍を始め、海軍・陸軍・空軍の各代表者が打揃つて御着を御待ち申上げて居つた。

東宮殿下には自動車をお下り遊ばされて、直ちに碑前に進ませられ、恭しく御脫帽遊ばされて御禮拜

*世界大戰の戰死者。

の後、月桂樹に紅白取りまぜた花を配して飾り、リボンを附けた其の上を、日本の國旗で圍んだ、美々しき大花輪を武官より御手に取つて捧げさせられ、二人の武官が更にそれを受取り奉つて記念碑の基底に手向けると、殿下は御脱帽のまゝで單身御前進遊ばされ、記念碑に向つて御拜あらせられた。



東宮殿下ホワイト・ホールの招魂碑御拜

次いで閑院宮殿下が御同樣御拜を遊ばされ、供奉員も亦之

に倣ひ奉つて順次禮拜をすませた。

斯くして式が全く了ると、今まで碑前に近く道の兩側に堵列して靜肅に拜觀してゐた民衆は、一時に萬雷の落ちるが如き響を以て、熱烈なる拍手を送り奉つたが、殿下は、歡喜の念を以て熱心に呼號し奉る民衆の叫の中を、自動車を驅つて御退出、それより直ちにウェストミンスター*寺院に赴かせられ、同じく戰死者を弔ひ給うた。

五時寺門を御出になると、また其處にお歸りを待受けてゐた群衆は、再び歡呼の聲を揚げて、潮の如き拍手を送り奉つた。

あゝ、熱誠なる歡迎。これ程まで眞實性に富んだ心からの

*古來の王公碩學を葬つてある、言はゞ國葬院である。そこへ世界大戰戰死者一名を代表として入れたのである。

熱烈な歡迎を、何處の皇太子が曾て受けられたらう。此の日倫敦市中で日章旗が盛に賣れて、仕入れても仕入れても忽ち盡きたと云ふことは、如何に我が東宮殿下が、民衆の心の中に非常な魅力を持つていらせられるかと云ふことを、事實の上に示すものであつて、殿下が此の日停車場からバッキンガムの宮殿に向はせられた時も、特に熱誠なる市民に報いんが爲、御道程を御延長遊ばされて、ウエストミンスターから、次にはホワイトホール及びモールを御通過あらせられた事の如き、固より些末な事ではあるが、それが延いて英國民の感情に良好な影響を與へた事は大したもので、其の御優しき心づかひは、老いたる翁媼をも泣かしめ、可憐なる子女をも歡ばせた。これより以後殿下の御通過毎に奉迎者の數が益、多きを致し、御名の光榮を讃歎し奉るものが段々增加して行つたのは、全く其の源泉を殿下の御人格に發してゐるのであつた。

晝のバッキンガム宮殿が、殿下の御到着によつて光榮に輝き始めたのに對して、夜のバッキンガム宮殿は、宮殿内の大舞踏室に於て開かれた王宮晩餐會によつて其の第一幕を開いた。

其の夜の會場は、其の「輝く」といふ字が、文字通りに當てはまる程燈光に輝き、周圍の裝飾に輝き、式典に輝き、そして最も

賓客に輝いたものであつた。其處には、戰時中曾て一夜も見ることの出來なかつた、華々しい美しい夜があつた。

壁は悉く目も眩むばかりの金襴を以て飾られ、玉座の下に近く食卓が作られて、賓客は何れも金色燦爛たる禮裝をなし、食卓には全部黃金から成つた食器が配置され、それらの凡ての輝かしいものが華やかな燈火の光の中に相映發して居る光景は、大英國の昔ながらの典雅を思はせる、そしてまたロマンチックなものであつた。

會場の開かれたのは午後八時半であつた。其の時第一に先づ英國人の所謂「英國の偉大なる同盟國の皇儲」たる我が皇太子裕仁親王殿下が、英國皇后陛下と御手を組ませられつゝ御入場になると、其の次には英國皇帝が第一皇女の御手を取らせられ、閑院宮殿下はメリー內親王を、英國皇太子殿下はクリスチャン王女を伴はせられて靜かに御入場になり、やがて我が皇太子殿下は、英國皇帝陛下と英國皇后陛下との御間に、閑院宮殿下は皇后陛下の御右に、其の御隣にはメリー內親王が御着席あらせられた。

斯くして皇室の方々の御席が先づ定まると、其の次には供奉員・接伴員・各國大使同夫人・供奉の日本艦隊高官・首相以下大臣・日本關係者・並に宮內官等百二十八名が、男子は皆きらびやかな大禮服に光榮の身を裝ひ、夫人達は色とりどりの華やかなドレッシングに光輝燦々たるダイヤモンドや眞

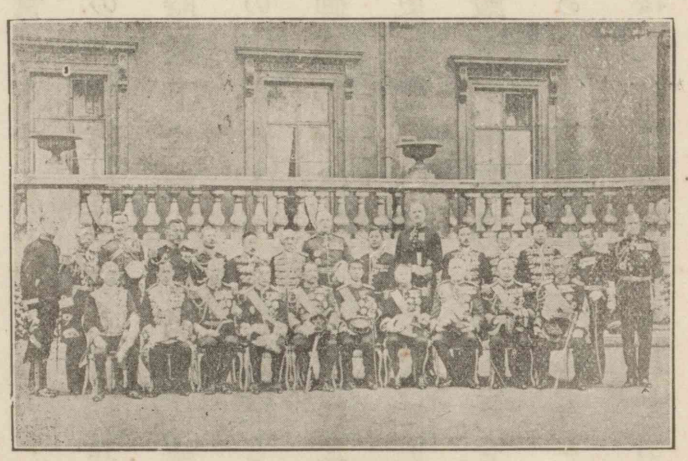
珠を飾つて、電氣裝飾の光に照されつゝ入り來つて、各、皆定めの席に着いた。

此の時室内の有樣を見渡すと、食卓は二個より成り、卓上には英國皇室の御寶器とも云ふべき名高い黃金の皿が置かれ、室内は普く赤のチューリップと白石楠花とを以て飾り、軍樂隊が一隅に控へて奏樂の合圖を待ち、侍者達は皆其の身分と職掌とによつて、小姓は白、舍人は緋色と黃金色、近衞隊はチュードル式の美しい制服を身に纏うて皇帝御椅子の直後に侍立し、席上には莊重嚴肅の氣分が充滿してゐた。

此の夜日本側では、主賓におはせらるゝ東宮殿下・閑院宮殿下を始め奉り、珠田供奉長・林大使等を加へて二十一人の者が其の席に臨んでゐた。

(一)伯爵珠田捨巳。今は東宮大夫。
(二)特命全權大使男爵林權助。

婦人としては只、*永井參事官夫人外一人が、金裝燦爛たる男子賓客の禮裝の中に異彩を放つて居たのであつた。



バツキンガム王宮内庭に於けるる東宮殿下御一行

斯くて宴酣にしてデザートコースに入るや、やをら御起立になつた英國皇帝陛下は、我が皇太子殿下の爲に乾盃を遊ばされ、英國國民の賓客として殿下を厚く御歡迎申上ぐる旨を述べられてから、尙引續いて事こまやかな御演說があつた。

*大使館參事官永井松三。

陛下の御挨拶が終ると、次いで御起立になつたのは我が東宮殿下であらせられた。　滿場の視線は期せずして皆當夜の御主賓におはします我が殿下の御身に注がれたが、其の時殿下は極めて高聲に、極めて明瞭に、さしもに廣い舞踏室の隅々にまでも響き渡るやうな威嚴のあるお聲で、大膽に御答辭を述べさせられ、珍田供奉長が英語に通譯し奉つて更に之を滿場に徹底せしめた。

殿下が、御答辭を述べさせられて英國皇帝・皇后兩陛下のために御乾盃遊ばされると、やがて晩餐會は終つて、それよりは*夜會に移らせられての御歡談となつた。　我が東宮殿下が、御自ら積極的にお進みになつて、多くの參列員たちの間

*この夜會には晩餐會の人の外數百人の一流紳士淑女が招かれてゐた。

にお交り遊ばされ、山本大佐を通譯者として極めて自由に御談話をおかはし遊ばされた御快活な御交際振には、一座の人々皆殿下の御聰明に感歎して、驚嘆すべき皇子」と讃美の言葉を捧げないものはなく、平常寡默にして、容易に自ら進んで他人との談話の中にくはゝらない、無愛嬌なビーチー提督すら、殿下の御態度には動かされ奉つて、航海の話や、其の他の珍しい物語を殿下の御前に聞え上げたのであつた。

殿下はそれからも尙一座の中心となつて、人々とお歡談をお續けになつていらせられたが、やゝあつて英國皇室側の御案内で繪畫館に入らせられ、數々の名畫を御覽になつた

後、十一時半頃に宴席をお退きになり、十二時過を以て御就床、バッキンガム宮殿に於ける御生活の最初の一夜をお過しになつた。（東宮御渡歐記）

二　千代女

朝顔につるべとられて、貰ひ水。

加賀の千代といふ名を知るもので、恐らくは此の句を知らない人はあるまい。

千代女は、加賀國松任（*マツタウ）の人、元祿十五年二月福增屋六兵衞といふ表具屋に生れた。家が表具屋だけに、種々の書き物を見た。まだ頑是ない子供の時から、文事に趣味を持つたのも、一つはそのためであらう。七歳の時、空行く雁の列を仰いで、

初雁や、ならべて聞くは惜しいこと。

といつた一句は、既に天才のひらめきであつた。

そのころ、松任に相河屋武右衞門といふ酒造家があつて、其の妻すへ女といふのは、當時の女性には珍しく學問もあり、手跡も見事で、俳句は金澤の堀田麥水（ハクスイ）といふ人の弟子であつた。千代女は、家事の手傳のひま〳〵すへ女に俳句を學んだのであつたが、後にはその手引で麥水の門人になつた。十五歳の時、當時名高い美濃の盧元坊（ロゲンボウ）が、諸國行脚の途次、暫く松任に杖を留めた。千代女は大旱の雲霓（ウンゲイ）を望み得た樣

*加賀國石川郡松任町。金澤市の西二里。

（一）加賀の俳人。天明二年歿す。

（二）仙石氏。各務支考の門人。延享四年歿す。

に、直ちに其の旅宿を訪うて、切に門人にしてと請うた。坊はその時床の中に居つたが、時鳥を題にして其の才を試みた。坊は千代女の數句に感心はしたものゝ、中々善いとはいはず、十句・二十句、隨つて成れば隨つて難じて居たが、更けゆくまゝに、いつしか旅の疲が出たのか寐入つてしまつた。千代女はなほ枕頭を去らず沈思苦吟してゐた。曉告ぐる鐘の音に坊はふと眼を覺して見ると、昨夜の千代女がまだ坐つて居たので、「もう夜が明けたか。」と問うたその言下に、

時鳥、時鳥とて明けにけり。

と千代女は應へた。そこで坊は手を拍つて感賞し「是だ、是だ、此の呼吸を忘れなければ、他日必ず天下に名を成すであらう。」と、いつて、卽座に師弟の約を結んだ。

千代女十九歳の時、金澤の足輕福田彌八といふに嫁した。彌八は彼の才と德とに望を屬したのであつた。千代女は我が身の貧窮なのと不器量なのを羞ぢて固辭したが、遂に彌八の誠意に感じて偕老の契を結んだ。

澁かろか知らねど、柿の初ちぎり。

これが當時の千代女の心中であつた。

琴瑟相和して翌年一人の男子もまうけたが、嫁して七年目に夫は歸らぬ旅路に赴いた。初七日に、

起きて見つ、寢て見つ、蚊帳の廣さかな。

と、詠じたが、その翌年愛子も父の後を追つた。

破る兒の無くて障子の寒さかな。

そのころ、五六歳の子供の路傍に嘻々として遊んでゐるのを見て、

蜻蛉釣、今日は何處まで行つたやら。

重ね〳〵の不幸に世をはかなんだものか、千代女はその翌年到頭尼になつた。年は二十七であつた。

五十三歳の初夏、一笠一杖、飄然として千代尼は句行脚に出た。京都から近畿關東諸國を經て、遠く白河の關を越え、陸奥に芭蕉の跡を偲び、知名の俳人と唱和し、一年半で歸鄉した。これから其の名が次第に全國に聞え、俳人の來訪も繁く句も妙境に入つた。

尼はまた畫を學んだが、脫俗の風があり、書も亦巧であつた。清貧に安んじつゝ適意のうちに晩年を送つた千代尼の素園は、安永四年九月八日七十四歳の高齡で眠るが如く往生を遂げた。辭世、

月も見て、われは此の世をかしくかな。

三　朝顔

朝顔や地にさくことをあぶながり。　千代女

朝顔の咲くや親にもしかられず。　智月(一)

雪の朝、二の字二の字の下駄のあと。　すて女(二)

土どめの杭のくづれや蕗のたう。　多代女(三)

(一)近江大津の人。芭蕉翁の門人。
(二)丹波の人。田氏。元祿十一年歿す。
(三)奥州須賀川の人。慶應元年歿す。

鼻紙のあひだにしぼむ堇かな。　園女(一)
井戸端の櫻あぶなし、酒の醉。　秋色女(二)
子を寐せたあひだを拔けて涼かな。　花讃(三)

(一) 伊勢松阪の人。度會氏。享保十一年歿す。
(二) 江戸の人。大目あき。享保十年歿す。
(三) 江戸の人。古川まつ。文政十三年歿す。

四　筑紫の秋

吉田絃二郎(四)

(四) 名は源次郎。文學者。

○

秋になると思ひ出すことが多い。

私の現在の生活が年々單調な機械的なものになつて行くほど、幻を追つてゐた青年時代のことが、此の上もなく尊いものゝやうに私の心に映つて來る。あの時代の事を思ひ出すといふ事は寂しいことであり、時としては胸の疼くやうな感じがすることでもあるが、あの時代の夢を現在の前に展げて見ると云ふ事は、たまらなく懷かしいことであり、又私の生活に取つて、此の上もない幸福なことである。

しかし、その思出が年々薄らいで行き、少なくなつて行くのは寂しい氣がする。

私の少年から青年時代が、主として田舍で過された爲に、私の青年時代の思出は大抵は田園のうちに殘つて居る。私の彼の頃の事を思ひ出すと、そこにはきつと田園の懶い空氣や、死のやうな靜寂が私の青年時代を包んで居る。私はこの夏十幾年振で田園生活に歸つて來た。朝起きるから夜眠る迄、自然に親しんでゐる。一週に一度色々な用足し

の爲に東京に出る外、終日青い曠野を見、高い空を見てゐる。自然私の青年時代の事などが思ひ出されて來る。

私の青年時代の思出のなかには、色々な人々が含まれて居る。もう一度會つて見たい、語つて見たいと思ふ人が可なり多い。併し、其の内に行くへも知れずになつたものもあれば、死んでしまつた人も有れば、會ふ機會の絶えてしまつた人もある。

私は故郷を二つか三つの年に出てしまつたので、故郷といふものに對する記憶は割合に少ない。十五から十七まで、學校に通ふ爲に故郷に歸つて居た。其の三年ばかりの間が、私に取つては唯一の故郷の記憶となつてゐるのである。

併し其の三年は故郷の地としてよりは、感激し易い青年時代の地として、より深く私の頭に刻まれてゐる。

Sの城下まで二里餘りも隔つた廣い稻田の中の、小さい農村に私は宿を借りてゐた。

昔長崎から江戸へ行く街道になつてゐたので、古い並木などがKといふ川の土手に沿うて繁つて居た。其の並木が雨の日など煙つて見えるのが堪らなく寂しかつた。

其の土手の下に三四十戸の草葺の農家が古い街道を挾んで列んでゐた。私が泊つて居た家の窓からは、城下までつづく平野が廣がつてゐるのが見えた。秋になると、稻の波を隔てゝ、城下の白い倉の壁が夕陽に映つて居るのが寂し

(一) 佐賀市。
(二) 川上川。下流は筑後川に入る。

く思はれた。

平原につゝまれた田舍に育つた人は、誰も經驗することで有らうが、國境の山々が幾十里の彼方にかすかに佇んで居るやうな、廣い秋の稻田の中に見出す寂寞ぐらゐ、心に沁むことは無い。

私はあの頃の秋の平原を思出すと、今でも地の上にしやがんで泣きたいやうな氣がする。

少年の心は秋の野を歩く毎に痛いほど疼くのであつた。

私はあても無く稻の中の小路を歩いた。稻に隱れた廣い沼が忽然として私の前に現るゝこともあつた。其處には菱の白い花が咲いて居た。若い女が紅い襷を掛けて半切

といふ大きな盥に乘つて、たゞ一人で、菱の實をもいでゐるのもあつた。又或時は水草を搔分けて釣を垂れて居る男が稻の蔭に寂然としやがんでゐることもあつた。沼の上には白い雲の影が動くとも無く動いて居た。

温泉岳

稻の間を縫ふ小路は、大抵は白い野菊が咲いて居た。晝日中から、こほろぎは草の中にころ〳〵と鳴いて居た。それが地の底からでも涌いて來るやうな寂しい聲であつた。國境の山が霞

み、溫泉嶽が黑い影につゝまれるやうになると、幾里もつゞいた櫨の土手が靄に包まれて來るのであつた。鎌を持つた農夫や釣竿をかついだ男たちが、默つて稻の中を靄の中へ消えて行くのであつた。

あの時代の事を思ふと、本當に泣出したいほど懷かしい氣がする。

○

青年時代の思出に浮んで來る人々の中で、私が一番に會つて見たいと思ふのは、私が泊つて居た家の主婦である。冬になると、星を戴いて私は家を出るのであつた。城下の入口に這入る頃、夜が白々と明けるのであつた。私が學校に

*肥前の島原半島にある有名な活火山。

通ふ日は、主婦は一番雞が鳴いて間も無く起き上るのであつた。私は眞つ暗なうちに起きて、戸外の流に行つて顏を洗ふのであつた。星の影が冷たく流に映つて居る。廐の中の馬がかさ〳〵と暗の中に音をさせてゐた。

學校からの歸り路では、大抵城下の町を出外れようとする頃から日が暮れかゝるのであつた。城下の町を出て十七八町も歩いた頃に、櫨の土手があつて、其處は昔、藩の刑場になつてゐたので、今でもどうかすると、骨などが桑畑の中から出て來ることがあるといはれて居た。少年の心には雨の夜など通ると、薄氣味惡く思はれることもあつた。畷の中程には、刑場へ引かれて行く囚人と、身内の人々とが別れ

の盃を酌み交した處だといふ「別れの松」といふ老木もあつた。

學校から歸つて來ると、主婦は團子などを拵へて待つて居た。

或寒い日であつたが、私が學校から歸つて來ると、主婦は胸のあたりまで、流の中に這入つて頻りに物を探してゐた。

「どうしたんですか。」と私は訊ねた。

「申譯がありません、あなたのお箸を片方水の中へ落しましたので……。」と云つて、氣の毒なほど悲しい顔をしてゐた。

私は誰よりも先に此の主婦に會つて見たいと思ふ。

○

あの時代の事を思ひ出すと、源六といふ老爺のことが浮んで來る。土手の下に小屋を拵へて四五人の子供を持つてゐたが、源六の二人の男の子と、私はよく沼の中に烏貝を捕りに行つた。恐らく今では源六の孫たちが、あの沼の烏貝を捕つてゐることであらう。

櫨の土手を上り切つた處に掛茶屋があつた。家のまはりには、夏はよく鶺鴒が鳴いてゐた。掛茶屋には瞳の黑い女の子が居た。もう今では幾人かの母となつて居るであらう。

そして其の子供達が沼に行つて菱の實を穫つたり、鶺鴒を追つかけまはしたりしてゐるであらう。

筑紫の平原を思ふと涙が流れる。源六爺よ。源六の子た

ちよ。誰よ。彼よ。

菱の花が白く咲いたであらう。秋が近づいて來たであらう。平原の涯に城下の白い倉の壁がほの見えてゐるであらう。

あの頃と同じやうに、旅の少年が寂しい心を抱いて、稻田の間を歩いてゐるだらうか。

筑紫の秋よ。お前を思ふと私の胸は疼く。（小鳥の來る日）

五　故郷

正*岡子規

*名は常規。伊豫松山の產。新派俳句の創始者。明治三十五年歿す。

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも、月にも、喜にも、悲にも、まづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め見聞を廣くする地にあらず。されど、故郷には歸りたし。故郷は事業を起し富貴を得る地にあらず。されど、故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親はらからとも今は故郷にあらねど、猶故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に、故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を厭ふふしもなくて、猶故郷こそこひしけれ。想へば、十餘年の昔、はやり氣の抑へ難くて、單身故郷を出でんとこそは勇みしか。いざ首途といふ際に、一點の熱涙の覺えず頰のあたりに流れ來れるを見送りの人に見せじと顏そむけたる時の苦しさ、何やらん胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故

郷の土とは離れうきものなり。」

故郷近くなれば、城の天守閣こそ先づ目を悅ばする種なれ。低き家、狹き町、淋しき松繩手、丈高き稻の穗、鼻の尖に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、いづれなつかしからぬはなし。

まづ身よりの家をこゝかしこと訪れて、久濶の情をのぶれば、年老いたる婆樣、痩せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顏さへ、見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きし瞬間なり。」

變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變らずと見るうちに、聊かながらかれもこれも變り行きたるこそ、なか〳〵に聞きて、見て、ゆかしけれ。人の上につきて第一變りたるは、わが從弟妹のいたくも成長したることなり。「都の人こそ來たまへれ。われも其の顏見ん。」などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙よりはづかしげに窺ふもあり。幼きは、はじめて見たる顏もあり。さらぬも、おもかけばかりはもとのまゝにて、振分髪の兒髷に變りたるも少なからず。曾て見し時には、小學讀本を高らかに讀上げて誇らしげに人に聞かせたる男の子の、今ははや海陸軍を談じ、外國の形勢を說く程になりたるもあり。唐黍の殼などもて拵へたる雛を箱の上に並べ、まゝ事に餘念なかりし女の子の、嫁入すべきほどになり

て、わが膝のもとに茶を汲みて置きながら、顔もえあげで退きたるなど、思へば、彼方よりは我をもしかく年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、何縣士族寄留といかめしく標札うちたる家どもの、大方は聞知らぬ人の名を示して、中にも陸軍出仕の人々多く見受けらる。小さき時より馴染なりし本屋は昔の様ながら、見知らぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らで、外々しくもてなしたるも、本意なく覺ゆ。豫て知りたる道具屋は引越しゝか、潰れしか、あらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に料理屋の軒を並べたるもあいなしや。

いで、菩提所に詣でて久しぶりに樒にても手向けんと辿りゆけば、山門半ば崩れて、一條の汽車道は其の傍を横ぎれり。あなやと驚きて、少しく左に曲れば、數百の墓累々として、未だ荒れはてぬとにはあらねど、彼の鐵道に隔てられ、父君などの墓の後には、一歩ならぬに、粟・黍など秀でたり。一目見るより覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穂のこゝを叩くな、此の墓を。

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

（子規隨筆）

六　紅葉の便り

佐々木信綱*

思はぬ御無沙汰いたしをり候。去年の暮御出の折の

*歌學者、歌人。家を竹柏園と號す。

御物語にて御地の樣子承り候うてより、是非一度御尋ね申したく存居り候ひしに、春の頃は必ずと思ひ立ちつゝ障ありて果さず、いつしか秋風身にしむ今日と相成り候。さても、その折、御あたりは紅葉いとよろしと承り及び候ひしが、見頃は何日頃にて候はん、御知らせたまはりたく願上げ候。この品々この頃東京にてはやり候ものに候まゝ、御娘君たちに差上げ候。まづは御伺ひまで。時節柄御厭あらまほしく候。かしこ。

（文のしをり）

大和田建樹*

*國文學者、歌人。明治四十三年歿す。

七　湖畔の秋

兼平(一)の墓を右に見つゝ、粟津の松原を行過ぐれば、石山道は瀬田(二)川の南岸に沿ひてつきたり。左には漕ぎくだし漕ぎのぼす舟の姿、右には染めはじめ染めつくす秋の色、目もいとまあらざるに、寺ははや前に來れり。門を入れば見上ぐるかぎり悉く紅葉にて、山を燒き天を焦がす好時節。唯思ふ、獨り見て獨り歸る事の殘りおほさを。身を屈めて樹陰の落葉を拾ひあつめ、ポッケットにをさめて石段をのぼれば正面なるが源氏の間なりと車夫敎ふ。案内乞ひて、式(三)部が書きしといふ大般若經や其の畫像やを觀をへて、本堂の欄干によりつゝ見おろせば、青木にまじる紅、また一入なり。めぐりて奥の方に出づれば、床几ありて、こゝよりは瀬田川

(一) 今井兼平は木曾義仲の部將。寿永三年義仲と共にこゝに戰死す。近江國石山驛の西方數町、鐵道線路の北方にその墓がある。

(二) 琵琶湖より流れ出る川。

(三) 紫式部。

一目に見おろさる。橋は朽ちはてゝ修繕中なれば、眺望の數に入らねど、月を眞東に待出でん夕べのけしき想ひやられて、腰打ちかけて見渡す。それより寺を出で、膳所の町すぎて義仲寺に詣づ。

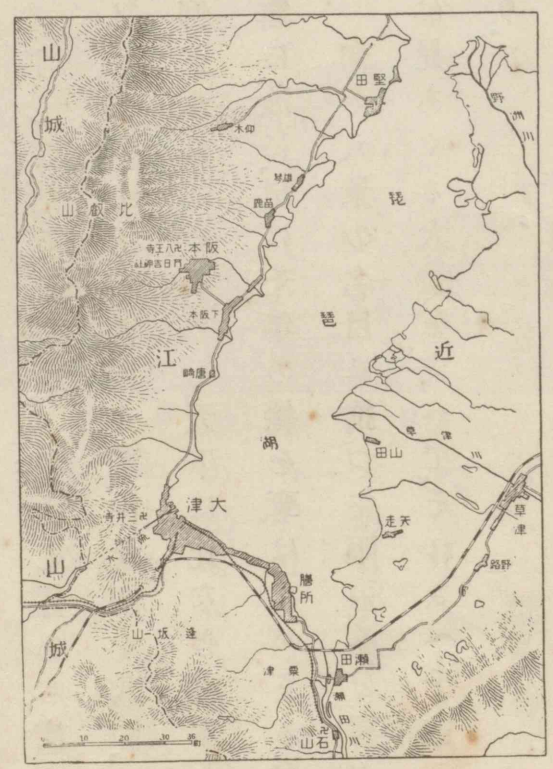
石山寺觀月亭

朝日將軍の墓は二疊ほどの臺石なる五輪にて、雞頭のしをれたるを花筒に殘せり。比叡が嶺おろしは今も來りて苦むす石の面を拂へど、深田に乘入れられし駒は主人と共に歸る世あらず。

(一)大津市大空馬場にある。

(二)木曾義仲。

(一)三井寺より見わたす湖水の景は、聞きしにもまして面白し。名物に辨慶の力餅あり。車夫は、之をくひつゝ、あれよこれよと指さし示す。月夜ならねど先づ口ずさまるゝは(二)謠の文句なり。鐘樓は奥の院の右手にありて、此の邊にはもみぢまばらに見ゆ。辨慶の引きずり鐘など見物して山を下れば、麓



大津附近地圖

(一)大津市の西部にある。園城寺。

(二)「三井寺」と題した謠曲。

に三尾神社あり。古色蒼然たる社殿を中に、銀杏・楓もて圍めり。是も尋ね漏らすべき秋にはあらじ。

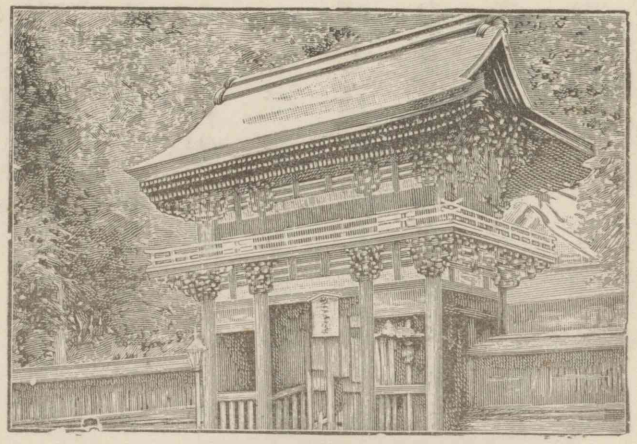
雨ならずして唐崎を訪ふ。松(一)もし靈あらば心なしとや恨むらん。然れども東西四十間、南北四十八間、一起一伏して天を仰ぎ水に臨めるさま、天下に比なき神木たるは知れり、霜に、雪に、波に、嵐に、千年の緑を奪はしめざる名木たるは知れり。何ぞ八景の名目に拘つて雨のみを喜ぶべき。數十の杖は見あぐる大枝を支へて、それさへ千古の苔に閉ぢられたり。

石の大鳥居と立ちつゞける石燈籠とをおきて、黄と紅とに世を讓りたるは日吉(二)神社の境内なり。花か錦か。花なら

(一)老松は大正十年に枯れた。今あるのは後に植ゑたるもの。

(二)近江國滋賀郡坂本村の西北部比叡山の麓にある。官幣大社。もと山王權現といふ。

ばかくは照らさじ。錦ならばかくはにほはじ。坂本のもみぢよしとは聞きつれど、これほどまでとはいかでかおもはん。瓢(ヒサゴ)を提(サ)げて、行く人歸る人のこゝにのみ集るも理(ことわり)なり。



日吉神社樓門

本社は丹塗の門より内に神さびたてるこそ尊けれ。金燈籠(カナ)の色、こけらの色、おのづから參拜者をして信心肝(きも)に銘(メイ)ぜしむ。拜しめぐりて二の鳥居に歸れば、そこには川水清く流れて、石橋あり。床几をならべて人の休むを待つ。こゝより見れ

ば、上なるもよし、下なるもよし。水さへ岩さへ染めつくして、醉へるもの人のみならず。

林を隔てゝ、「紅葉狩」*うたふ聲するは西京などの客にやあらん。げにも顏まで鬼のやうになりたる人の多きぞかし。

「こゝまで來つるに八王子見殘さんや。」と、車夫のすゝむるに應ぜしは、途中にて高く仰ぎ見たるけしきの忘れがたければなり。道急なりといへば、靴をぬぎて草履にかへ、外套を車夫にもたせてのぼりにかゝる。七八町なりといへど、馴れぬ山路なれば頗る遠し。二棟の社は最も高き處にありて、幾星霜とも知られぬ建築、神々しさ限なきに、風の掃き集めたる紅葉は自然の錦を敷きて拜殿を飾れり。こゝの紅

*謠曲。妖鬼が美女に化して平維茂をもてなし、後に本性をあらはす仕組。

葉は最早人間界とも思はれぬほどにして、火の如く入日の雲の如きが、天をおほひ宮をまもりて立ちつゞけるさま目も及ばず。

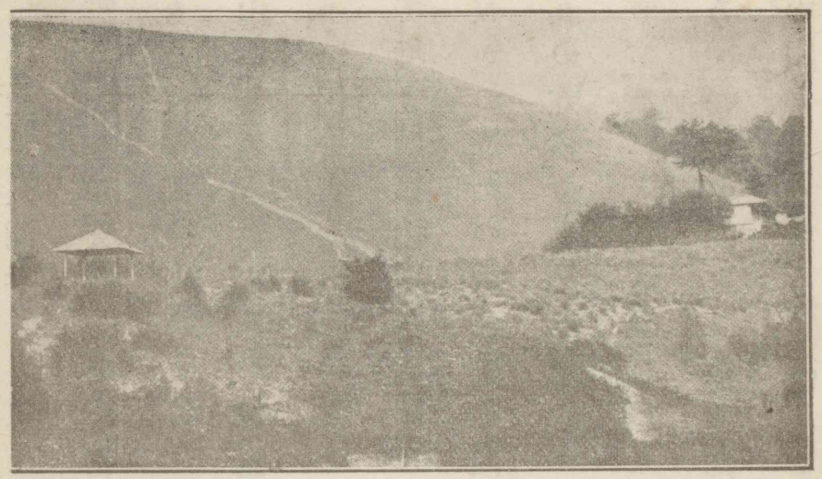
山いよ〳〵高くして琵琶湖いよ〳〵廣く、今は大津・唐崎・坂本・堅田のあたり迄一幅の彩色畫となり來れり。水を隔て堆きは鏡山(一)、其の右手に人家の見ゆるが山田・矢走の村々。又かの煙たつ方に遠く霞めるは伊吹山(二)にて、伊勢の鈴鹿(三)は其の左に少し顏を出したりなど、敎へらるゝまゝに興趣盡きず、疲れし足も忘れはてぬ。

あゝ轉變の急なる人の世に、千古の色を改めざるは此の水と山とあるのみ。（雪月花）

(一) 近江國蒲生郡にある、比叡山より湖水を隔てゝ眞東に見える山。
(二) 近江國坂田郡にある、近江美濃の境に峙つ。
(三) 伊勢國鈴鹿郡にある、伊勢近江の境をなす山。

(一)春日山の北の小山。一體に芝生の山。

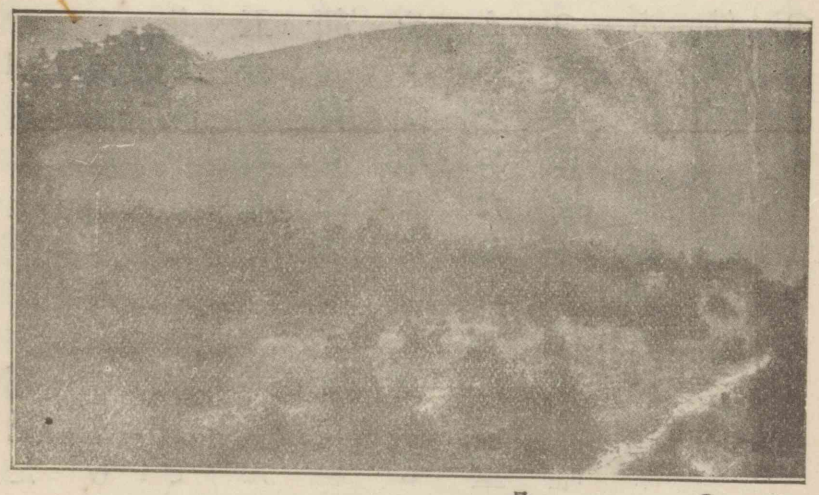
(二)著述家。蘆花と號す。



八　嫩草山(一)

徳富健次郎(二)

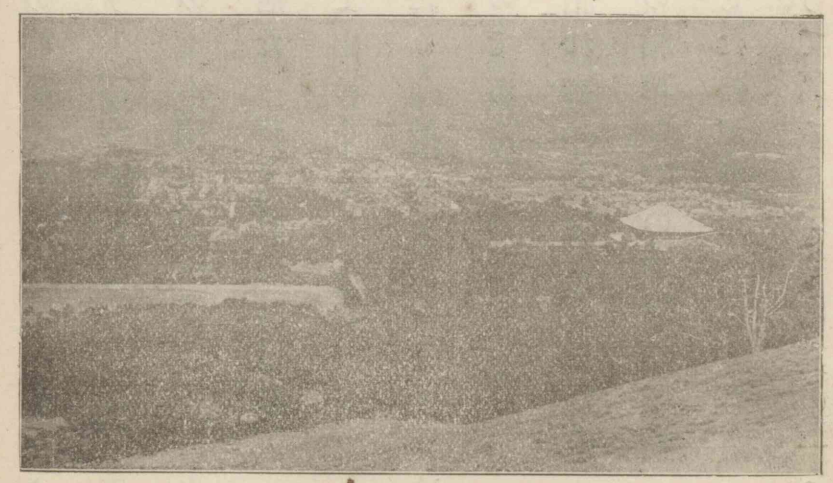
名を聞いてさへ優にやさしい嫩草山は、見て美しく、思うてなつかしい山である。八年前の十一月、はじめて奈良に來た夕、宿屋の二階から、紺青に煙る春日山につゞいて、貂の皮で包んだ樣に暖い色の、ふつくりとした嫩草山の美しい姿を見た時、



余の心はどんなに躍つたであらう。丁度誂へたやうに、十五夜のまん圓な月が其の上に出て居た。併し、其の時は遽しい旅で、山に上ることも果さなかつた。今始めて其の懷ひを辿るのである。

霜枯れ初めた矮い薄や刈萱や他の枯草などの中を人の蹈み馴した路が幾條か、麓から頂へ通うて居る。余等は其の一つ

を傳うて上つた。打見たよりも山は高く、思うたよりも路は急に、靴の足は滑りがちで、約十五分を費して上り果てた時は、額も背も汗ばんで居た。頂はやゝ平坦になつて、麓からは見えなかつた頂が、まだ二重になつて、後に控へて居る。唯一つある茶店は最早店をしまひかけて、頂には遊客が一人もなかつた。

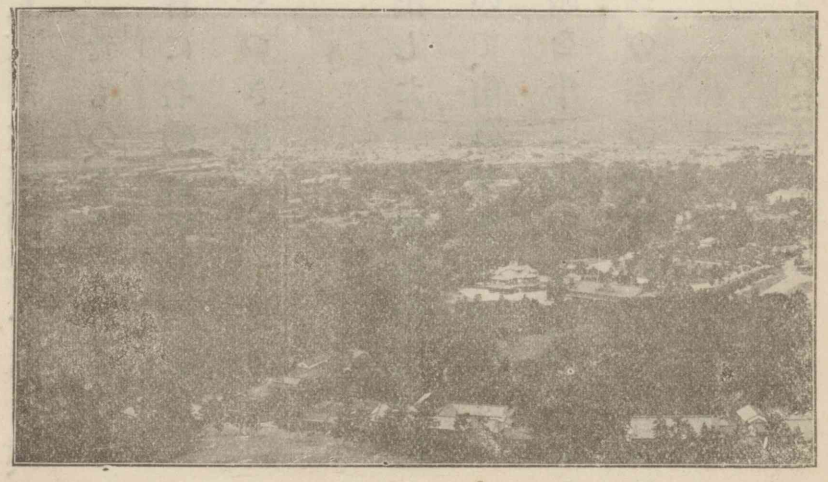


奈良市

(一)河内國河内郡。
(二)大和國生駒郡。
(三)大和國生駒郡。
(四)多武峯ともかく。大和國磯城郡。談山神社がある。
(五)泊瀬川とかく。大和國磯城郡初瀬村。

余等は額の汗を拭つて、嫩草山の頂から大和の國の國見をしようとて、眼を放つた。

夕方である。日はすでに河内の金剛山(一)と思ふあたりに沈んで、一抹殷紅色の殘照が西南の空を染めて居る。西、生駒(二)、信貴(三)、金剛山、南、吉野から、東、塔(四)の峯、初瀬(五)の山々は、大和平原をぐるりと圍んで、蒼々と暮れつゝある。此の暮山の屏風に包まれた大



の景

(一)大和國高市郡畝傍山の東北。
(二)大和國生駒郡法隆寺に在る。推古帝十五年建立。
(三)畝傍山の西麓一體の地。

和の國原には、夕煙立つ紫の村、黄ばんだ田、明るい川の流、神(一)武陵・法(二)隆寺、千年二千年の昔あつたもの、今生きてゐるものの總てが、夜の安息に入る前に、日に名殘を惜んで居る。

足の下で、奈(三)良の町の火が美しくつき出した。蜂の群のつぶやきの樣な人聲・物音が響く。

ぼうん。麓の方で、晩鐘が鳴り出した。其の鐘の音に促されるかのやうに、鴉が啞々と鳴いて、山の暮から野の黄昏へと飛んで行く。余等は今一度眼を平原に放つた。もはや、日の名殘も消えて、眼に入る一切のものは、蒼い靄に包まれた。

大和は今暮れるのである。（みゝずのたはこと）

(一)歴史學者。文學博士。東京帝國大學文學部講師。
(二)岩代國南會津・大沼・河沼・北會津・耶麻の五郡の古名。
(三)元中元年、葦名貞盛、若松城を修めて鶴城といふ。
(四)北會津郡一箕村の小山。若松市の東にある。
(五)北會津郡東山村湯本。若松市の東南一里。

九　鶴が城

大(一)類　伸

我が國古城の數多い中で纍々たる廢墟、荒涼の感がひしひしと身に迫る思のあるのは、實に會(二)津若松の鶴(三)が城である。

私が若松に來た目的は飯(四)盛山の白虎隊の墓でもなければ、無論東(五)山溫泉でも無い。唯、荒れに荒れた鶴が城の廢墟にあつたのである。

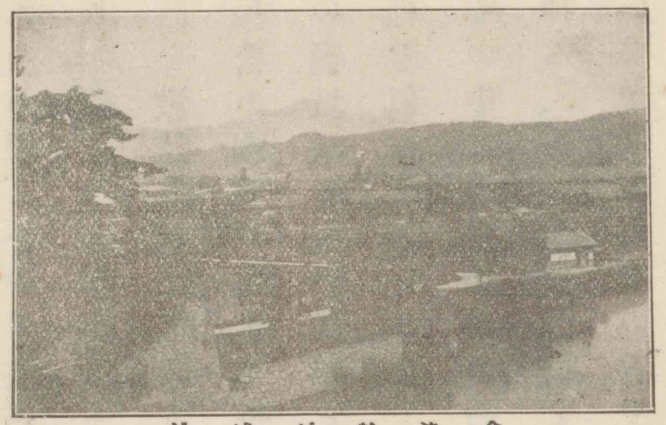
私は若松に着くと、直に寫眞機を肩に、城址を訪ふべく出掛けた。榮町の角を曲ると、廣い通りの突當りに、眞黑な森の立塞がつたのが見える、言ふまでもなく是が古城である。

やがて濠端に出るとそのあたり一面に草が繁つて、古沼の

様な濠は葭と水草で被はれ、石垣も亦苔と蔦とで隠されてゐる。その後には二の丸・本丸の石垣が、幾重にも重なつて見える。この古びた荒廢した濠や石垣、それには何か怪奇な物語でもありさうな感じがする。

路は石垣に挾まれた狹い間を曲り紆つて、二の丸から本丸へと入つて行く。この紆餘曲折を極めた路は、今日でこそ交通に不便であるが、昔はこれが城の固めであつた。實に築城家の苦心の結晶である。

本丸といはず二の丸といはず、全城すべて夏草の繁りに繁らぬ處は無い。殊に苜蓿が、誰憚る所なき有様で一面に蔓つて、綠の上に漂ふ如き白い花を咲かせてゐるのが、如何にも心地よい。



會津鶴が城址

本丸の中央には天主臺の址がある。その石垣の内部には深い凹みがあつて、多くの石が中に崩れ落ちて穴を埋めて居る。昔この石垣の上に、五重の天主閣が巍々として聳えて居た當時は、この穴は米鹽の貯藏場であつたとかいふ。一説に、これは拔穴で、城外に通じて居たのだといふ人もある。

今は只崩れて落重つた石と、丈に餘る草とで埋められて居

るに過ぎない。

本丸の隅に小さな茶店がある。其の老主婦はよく話をする。私も亦面白いからいろ〳〵尋ねると、維新籠城當時の話を激越な調子で語る。滿城寂として聲なく、たゞ遠くに*兵營の喇叭が聞える位なもの、この淋しい古城の址で維新の籠城談を聞いて居ると、何だか私も五十年の昔に返つた樣な氣がする。

その中に或會津人の話になつたが、主婦は話の中に言葉を挿んで、「あの人は平民です。」と云つた。聞けば此の主婦は、低いながらも士分の者であつたさうだ。「あの人は平民です。」の一語は明治・大正の言葉ではない。私は生きた封建時代を眼のあたり見る心地がした。（史蹟めぐり）

*歩兵第六十五聯隊。

一〇　皇室に關する敬語

我が皇室儼として萬民の上に位し、人民を視給ふこと慈母の赤子に於けるが如し。故に、國民尊崇の念溢れて、言語の上にあらはれては、皇室に關する敬語となれり。

皇室に關する敬語に種々あり。皇室典範に定められたるものあり、古より慣用せるものあり。皇室典範には、その第十七條に「天皇・太皇太后・皇太后・皇后の敬稱は陛下とす。」同十八條に「皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・内親王・王・王妃・女王の敬稱は殿下とす。」とあり。

古より慣用せるものにはその類頗る多く、用ひかたも樣々あり。今、序を逐うて之を述べん。

天皇・天子・皇帝・陛下・聖上・至尊・主上・御門・現津御神・大元帥は皆天皇を稱し奉る語なり。令には、「天皇は詔書に稱する所、天子は祭祀に稱する所、皇帝は華夷に稱する所、陛下は上表に稱する所。」と見えたり。大元帥は陸海軍を統帥し給ふ上に就きて申し奉る。乘輿・鳳輦・鸞輿は御輿なり。車駕・龍駕は御車なり。行幸・臨幸は天皇の皇居を出でて他所に行き給ふをいひ、その皇居に還り給ふを還幸・還御といふ。鹵簿は車駕の次第なり。三后・皇太子・皇太子妃の他所に行き給ふを行啓と云ひ、その還り給ふをば還啓といふ。

宮城・禁裏・禁中・禁闕・御所・内裏・九重は皆皇居を稱する語なり。他所に行幸し給ひてしばしおはします所を行宮又は行在所といふ。又、他所に留り給ふことを駐蹕・駐輦といふ。明治四十年に公式令を定めて、詔書・勅書・上諭等の別を明らかにせらる。皇族の命をば令旨と稱す。

天位・宸極・高御座・寶祚は天皇の御位なり。天聽・叡覽・聖慮・宸襟などは天皇の御聞見・御思慮を稱する語なり。乙夜の覽とは天皇御政務の御暇に書見し給ふをいふ。聖德・聖鑑・大威・聖恩・乾德などは天皇の御德に關する語なり。皇后の御德をば坤德といふ。

天顏・龍顏・玉體・玉歩・玉座・便殿は天皇の御容貌・御動作・御座席

に關する語なり。政治に勉勵せさせ給ふを宵衣旰食し給ふといひ、出入し給ふを出御・入御といふ。欽定・裁可は御裁定なり。寶算・聖壽は御齡なり。御宇・御治世は御世なり。宸翰・宸筆は御書なり。御盃を天盃といひ、御詩歌を御製といひ、三后以下のをば御歌・御詩といふ。天皇の御機嫌を天機といひ、三后以下のを御機嫌といふ。東宮・春宮は皇太子を稱し、金枝玉葉は皇族を稱す。皇子孫の生れさせ給ふを降誕といひ、皇女の臣下に嫁し給ふを降嫁といふ。

是等の敬語の中には、我が固有の語に漢字をあてたるものあり。或は漢語をそのまゝ用ひたるあり。或は古用ひ、今多く用ひざるあり。或は古になくして今あるものあり。

かく樣々なれども、要するに、均しく皆尊崇の語なるなり。之を外國語に比するに、固より日を同じうして語るべからず。是我が皇室の尊嚴なる所以なり。されば、我等國民たるものは是等の敬語を常に能く心得置くべし。濫稱誤用して、かりにも不敬に陷ることあるべからず。（國語教程）

二　紐育

黑板勝美*

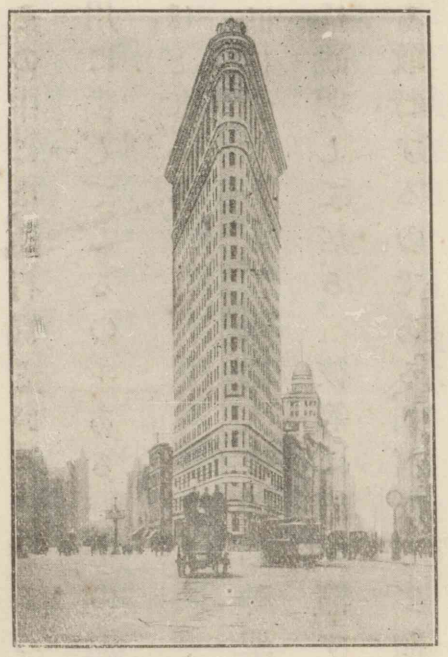
*歴史家。文學博士。東京帝國大學教授。

その一

紐育に入つて目に觸れるもの一として大といふ感を與へないものはない。ナイヤガラに於て天然の大に驚いた余は、此處に來つて、又人力の如何に大であるかに驚かざるを

得なかつた。紐育の前身新アムステルダムの小さい港から、米國の發達につれてます〳〵發展して來た米大陸第一の都會は、今後十年を經過したならば、その人口は倫敦の上に出づるだらうとは、米國贔屓の說である。五丁目通(ファフティアヴェニュー)・廣小路(ブロードウェー)、さては、東京の兜町ともいふべきウォール街あたりの下町は、肩摩轂擊ともいふべき處で、自ら歩かずとも、後から推されて何時の間にやら四五町先に行つて居るといふ次第。街の兩側には天を摩する大厦・高樓が爭ひ立つて、十五階・二十階ははや珍しからず、四十階から五十階の高樓が空中に聳えて居る樣は、到底他の大都會に於て見ることが出來ない。其の上層は雲に蔽はれるかと疑ふばかりである。

此等紐育市の中心に聳えてゐる宏壯な建物の中には幾十・幾百の會社・商店があり、幾千・幾萬の重役・書記等が忙しく其の職務に從事して居る。されば、或意味に於て、紐育はたゞに地上の都たるのみならず、又、空中の都である。横の都たるのみならず、又、縱の都である。地上の都を聯絡してゐる高架鐵道・地下鐵道・市街鐵道等の電車は、殆ど終夜運轉し、馬車・自動車は縱横にかけ廻り、町外れに住む者でも、十數分時を費せば、



紐育の高樓

市の中央で買物をすることが出來る。是と同樣に、縱の都には、何處にも三臺若しくは五臺の昇降機が設けてある。その中には、急行機といふのがあつて、是は十階以上だけの用に供してゐるのであるが、その速きこと殆ど目がまはるほどである。

「時は金である。」米國人の勞働神聖主義は、此の格言を切實に說明して居る。彼等は時を節するには如何なる設備をも敢行するのである、如何ほど多額なる費用をも之に投ずるに吝ならぬのである。又、彼等は決して金を惜しむものでない、金を儲けんとするものである。彼等は金を儲けんが爲に、時を活用せんとするものである。商業の中心點に

*名は柳大郎。文學者。もと新聞記者。

おいて雲表に聳える高樓を建つるのもこれがためである、市內の交通機關に惜氣もなく資本を投じて改良を計るのもこれがためである。啻に市內のみではない、米國の汽車ほど快速力を有し、愉快な設備をして居るところは他に餘り見ることが出來ないのである。（歐米文明記）

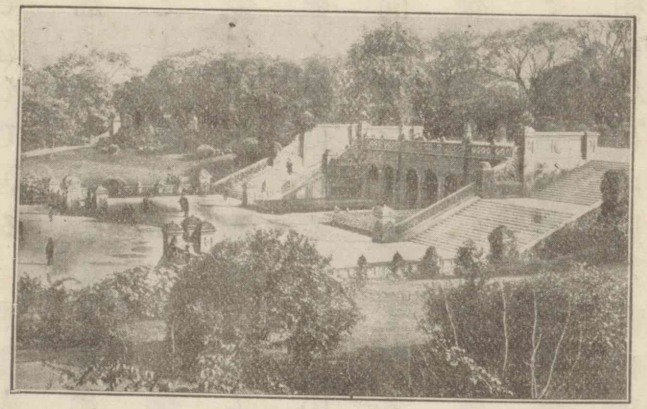
その二

澁川玄耳*

世の中に贅澤なものは中央公園（セントラル、パーク）だらう。一坪何萬弗といふ高い地價のマンハッタン島、紐育の眞中に、途方も無い長さ三哩、幅半哩の廣大な地面。

紐育の住民は、たとひ如何なる長者の邸宅でも、庭園といふものが無い。上へ〳〵と重なつて、重箱の中の薄暗い窮屈

な住ひをして居る。家も道路も鐵か、石か、煉瓦か、セメント。土を踏み草木を眺めるといふをりは殆ど無い。まるで牢屋の生活だ。如何に無風流な亞米利加人も、是ではやり切れない。日の光を好むのは草木ばかりで無い。なんぼ地下鐵道で潜りなれても、まだ土龍（もぐらもち）にはなりきれぬ人間だ。やはり、草木と同じく日光を喜び、土と水とを慕ふのである。そこで、紐育のやうな處ほど公園の入用があるのだ。さすれば、中央公園は、四百萬の人間に對しては贅澤でも何でも無い、ぎり〳〵決着の小公園とも謂はれるのだ。何事も金に厭かせる亞米利加人だ、公園の拵も何のおろかがあらう。千畝の綠草風軟かに、萬幹の碧樹影濃かに、大道細徑其の間に通じて、屈曲逶迤、たどりたどれば、丘がある、谷がある、複道空を亙る所もあれば、拔け路の闇を潜る所もある。池がある、湖がある、小川がある、泉がある、舟がある、橋がある、金魚が居る。呼吸つきに來る群集は大したものだ。或道筋の如きは、十町許りも樹陰に椅子が兩側に續いて居る、それに殆ど空席が無い。夏の夜の寢苦しい時になると、椅子どころか、此の大面積が人に滿されて、此處に夜を明す者



紐育中央公園

も少なくないといふ。運動場の芝生には老若男女打雜つて遊んで居る。西洋人の運動好きをなぜかと平生思つて居たが、身動きのならぬ窮屈な住居をして居るから起つたことだと思ふ。

金魚は人に馴れて居らぬが、禽は馴れて居て、手からやる餌をくひに來る。珍しいのは栗鼠だ。ちよろちよろと樹の間の芝生を走つて居るのが、ちゆつちゆつと口を鳴らすと、後脚でちよいと立つて、覗く。南京豆を見せてやると、ちよこちよことやつて來て、捉るが早いか、四五間去つて、とある樹の根に中腰をして、前脚を使つてそれを咬る。誠に可愛らしいものだ。（世界見物）

一三　金米糖の壺

柴*田鳩翁

*通稱謙藏、京都の人、心學の講話をして諸國を遊歷した。天保十年歿す。

さる御町内に婚禮振舞がございました。お年寄を始め、一同座に就きますると、色々の馳走がでる。時に、かの年寄は酒といへば見たゞけでも醉ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄樣は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちと、お菓子なりとも御取りくだされい。」と、南京古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて來る。座中も、「これは好いお心附。ひらにお菓子を召上られい。」と薦める。年寄もわるうはなし、「然らば、頂戴を致しませう。」と、壺

を引きあげ、手首を突込みしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて、撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。

どうぞして拔けるかと、色々にこじまはして見ても、引張つて見ても、拔けず、まご〳〵して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」「いや、手が少し詰りまして、思ふ樣に拔けませぬ。」と眞顏になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體にお手をお引きなされ。」と、一人が向ふへ廻つて壺をつかまへ、後へ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有樣、景清と美保谷が鋸曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はな

(一)惡七兵衛景清。
(二)美保谷十郎。

かなか笑はず、泣顏になつて、どうも痛んで拔けませぬ。」といふ。さあ、これから大騷になり、「醫者どのを呼んで來い。」接骨ではいくまいか。」と、酒宴の興も醒めはてました。

時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騷ぎなされな。我等承つたことがある。「昔司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に大きなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助りました。」と或人の話ぢや。今お年寄の御難澁はこの話によう似て居る。いざや、我等が

*名は光、宋の名臣。

司馬溫公となつて、たとへば、その古染附けの壺が、失禮ながら、何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管を提げ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて雪を降らした樣になると、「やれ、お年寄、お助りなされたか。」と其の手を見れば拔けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。

（鳩翁道話）

一三　苦樂

*水戸藩主、元祿十三年卒す。義公と謚す。

徳川光圀

苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。恩を忘るゝことなかれ。子ほどに親をおもへ。掟におちよ。火におちよ。分別なきものにおちよ。朝寐すべからず。分別は堪忍なり。小なることは分別せよ。大なることは驚くべからず。九分は足り、十分はこぼると知るべし。

一四　冬

徳富健次郎

寒星一天、深黑なる屋根の上、深黑なる山の上、到るところとして星ならざるはなし。葉落ちたる欅の梢、大いなる箒の如く空を摩して、枝々星を帶びたり。靜かに中庭に立てば、山頂のあたり、波の如く夜嵐の過ぐるを聞く。殷々として

遠雷の如きは、隣家、夜籾を磨るなり。

寒樹

粉雪ちら〳〵、止みて日出でたれど、底冷えすること甚だし。日落ちて天紫なり。葉落ち盡したる欅の大樹、幹は老將の如くに硬く、節高なる梢頭より針の如く絲の如き千萬枝縱横にさし出でて、紫の空を刺せり。上に蒼ざめたる月あり。空はさながら凍りつきたる樣なり。

冬至

今日は冬至なり。

霜枯の草を踏みて野外に立てば、一望寒景蕭條として、枯蘆風に戰ぐ音、葉もなき川楊に囀る鶺鴒、水涸れたる野川の音、

何れも年の行く〳〵暮れなんとするを語る。

歳除

晴れず、曇れど降らず、鬱陶しき年の暮なり。

我が宿にも、山より松を伐り來りて立てぬ。前川に泊する舟の上にも松あり、注連縄あり。

天下、事なく、我が家、事無く、客無く、債鬼なく、又餘財なく、淡々焉として年は靜かに暮れ行く。（自然と人生）

一五　初日影

武島羽衣*

かゞやきまさる大東の國の光をあらはして、

*名は又次郎。國文學者、歌人。

やさしく武く勇ましく
豐榮のぼる初日影。

闇に迷へる天地の
胸に光の矢を投げて、
萬の物を生かすてふ
初日はげにも神なりや。

富士の嶺あふぐ寶田の
千代田の宮の松が枝に
こがねの色にさす影は、

をがまぬ人もなかるらん。

新に勝てる膠州の
海にうつろふ日の御旗
ひらめく上にさしそふは、
思ひやるだに勇ましや。

七五三縄くゞる萬歳の
聲にたぐひて入りくるは、
明けてめでたき新年の
ことほぎいふにさも似たり。

軒の小雀、初からす、
谷の小草も、野の苔も、
やさしき光身にあびて、
うれしき色音もらすかな。

かゞやきまさる日の本の
天皇のみいつをあらはして、
やさしく武く勇ましく
豐榮のぼる初日影。（續花紅葉）

一六　緣起

關根正直*

*國文學者。文學博士。前東京女子高等師範學校教授。

序

緣起といふ語は神社・佛閣等の緣つて起る所卽ち由來の意であるが、一轉して「緣起を祝ふ。」などといへば、將來の幸福を事の始に祝ふ意となり、再轉して「緣起がよい。」といへば事の前兆の意になるのである。

東京では、大晦日に、晦日蕎麥をたべる。蕎麥は長く延びるもの故、身代の延びるやうにと緣起を祝ふのである。轉居した時、引越蕎麥と稱して、近隣に配るのも、長く御交際の出來るやうにと祝ふのである。大阪では引越の時、附木を配るといふ習がある。附木は先に硫黃がついて居るから、

先祝ふといふ謎である。また祝儀の赤飯を容れる重箱には、南天燭の葉を敷く。これは南天を難轉の語に響かせて、緣起を祝ふのである。

新年の御供へ餅の下に敷く裏白といふ山草がある。これは深山にあつて、霜雪にも萎まぬ物であるといふことが既にめでたい。其の上、漢名を齒朶といふ。齒は齡の意味で、朶は枝である、枝は長く延びるもの故、命長く延びて茂るといふ義を取つたのだと言ひ傳へてゐる。橙と讓葉は親子代々讓り傳へて子孫繁榮する意味で用ひるのである。

餅の異名を齒固めといつて、これを食べると、齒の根が固まるといふ。齒は齡で、齡を固める、卽ち堅固息災で長命する

祝である。雜煮と一緒に食べるものにも、それ〴〵理窟を附けて、大根は身代が大きくなり、根の太る義で、菜は菜も食る、卽ち名も揚る、芋は芋食る、卽ち位も上るといふ意だと附會される。又、鰊の子を數の子の義にとつて、子孫の繁殖、一族の繁昌を祝ひ、田作を御健全の義とする類は、附け木を「先祝ふ」の名詮にしたのと同じ例で、全く我が國創意の緣起である。

正月は年の始であるから、緣起を祝ふことが多いのであるが、かう極つた歲時の祝儀の外にも緣起を祝ふ例が幾らもある。武士の勢力を張つた鎌倉時代からは、色々武家でも緣起を祝つた。其の一二をいへば、出陣の時祝盃をあげる

に、肴には打蚫と搗栗と昆布とを三方の臺に載せて出した。これは、打つて、勝つて、よろこぶといふ詞に寄せて祝つたのである。ところが、勝つて還つた凱旋の祝に、打蚫を熨斗蚫と替へて出したのは、勝つて威を伸すといふ意だと言ひつたへてゐる。食物ばかりではない。兵具・調度の類にまで名詮を尚んでゐる。例へば、昔の戰に大切な武器であつた矢の羽を、鷲の石打といふ羽で作ぐ。石打は、美しく討つといふ義にとつて、大將の矢と極めて居た。また箙にはおほく蜻蛉の形を附けてあるが、これも蜻蛉の異名を勝つ蟲といふからである。鎧の下に着る直垂には搗といつて、播磨の國から産する濃い藍染の布を用ひる。關東武士などは、

手近い處の上總の望陀木綿でよささうな物を、かちといふ詞を喜んで、着たのである。又、食物の話になるが、徒然草に、「鎌倉の海でとれる鰹魚は、彼の邊では非常に賞翫される。土地の老人の談にこれは近來の流行で、昔は一向賞美しなかつた。それが、今は上流の人の膳にも上る樣になつたのは、妙なことだと語つた。」といふ事が出てゐる。是も、恐らく、鎌倉武士の間に、勝男といふ名詮が喜ばれて、上流の士まで賞翫したのであらう。德川時代に、總ての祝ひ事に、鰹節を用ひたのも、「勝つ武士」と聞えるからだといふ。今も其の風は存してゐるが、意味は多く忘れられてしまつた。（心理研究）

*歴史家。文學博士。東京帝國大學教授。

一七　豐臣太閤の文事　三*上　參次

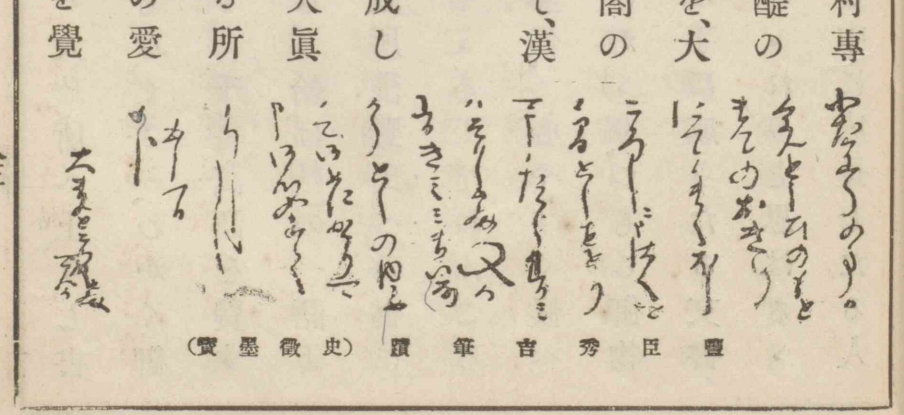
從來、豐臣太閤の人物・事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、又講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は、殆ど全く忘却せられたる如く、間、又いみじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲の人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し。眞に偉大なる人物は子細に研究するに從ひて、一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面には雄才大略の人なりしと同時に一面には、決して無學文盲の人ならざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に、舊大名たりし華族の諸家、古社寺・舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一・大村法橋由己・楠長諳正虎等の文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして

豐臣秀吉像（高野山蓮華定院藏）

生氣に富める文書、其の大部を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙・短册・消息の類も亦少なしとせず。西に東に遠征せる先より母なる大政所、夫人なる淺野氏、若しくは秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子・夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。

書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉・秀潤等の讃美の辭を加ふることこそ敢てする能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中、自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず。嘗て習字せしことの無き人には決



して能くし得る所に非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び敏捷を尚びしをいへるにて、漢字を知らざりしをいへるには非ず。

軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛錬なしといへども、天眞爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、その間に溢るゝばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺

ゆ。天正十八年、小田原在陣中に、母なる大政所へ上りし書の中に、「そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わかく御なり候て可給候。たのみ申候。」の語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ。」の一語より適切なるものはあらじ。また、その政所淺野氏への書には、「ねんごろに文給はり、御げんざんのこゝろしてねんごろにみ候ことし内にはひまあけ可參候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。」等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしこゝに太閤の口授にかゝれりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも、古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。

さて、太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十四日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを賞でて、其の下に徘徊せり。正親町帝之をきこしめし、やがて畏くも勅使を遣し、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感謝に堪へず、卽ち、

忍びつゝ霞とともにながめしも

(一)山城國葛野郡花園村に在る。細川政元創立。

(二)大和國吉野郡。

あらはれけりな、花の木のもと。

と返歌を上られき。又、天正十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりける(一)に、庭前の枝垂櫻未だ綻びずして、却て淡雪のちら〳〵と降り來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は
花をおそしとさそひ來ぬらん。

と詠まれき。感興、想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山、たれとむるとはなけれども、
今宵も花のかげにやどらん。

(一)天正十三年根來寺を討つ。
(二)天正十七年北條氏を伐つ。
(三)文祿元年。
(四)山城國宇治郡醍醐寺。
(五)洛東方廣寺、豐臣秀吉創建。
(六)魏の曹操の故事

と吟じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を、入相の
かねこそ花の恨なりけれ。

と歌はれたり。巧を弄ばずして、なか〳〵に雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他紀州征伐のときには、和歌浦・玉津島にて、小田原陣の折には、清見潟にて、征韓の役には、肥前の名護屋などにての詠歌も少なからず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは、勿論、醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては古英雄の横槊賦詩

の面影を想はしむ。而して、功成り名遂げたる、此の千古の偉人にも亦無常を感じたる事のありてや、

露とちり雫ときゆる世の中に、
何とのこれる心なるらん。

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あはれにも、

露とおき露と消えにし我が身かな、
なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに、太閤は伊達政宗・細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。

(一)名は宗易、泉州堺の人、茶人、天正十九年秀吉の旨に違うたので死を賜はつた。
(二)明治初年の人、國學者。

確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして予が原本を目擊したるものゝみにても、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には、學者をして往事を談ぜしめて之を聽き、又、禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。

(豐太閤に關する研究)

一八　茶(一)僧利休

堀(二)秀成

豐太閤大阪城におはしたる時、その傍を離さず、寵愛せられたる曾呂利新左衞門、茶僧利休と甚だ不和なりければ、何の時にか利休に不首尾に陷らしめんと考へ居たるに、或年の

冬、日の暮るゝ頃より、雪頻りに降出でて、夜半に至りて地に積ること七八寸にも及びぬ。時に、新左衞門思ひけるは、かかる大雪の夜半に至りては、彼も怠りて、御茶屋の爐の火もたやしたらんに、にはかに御出あらば、さすがの利休も困却すべしと考へて、太閤の寢所の御次まで參り、襖ごしに申しけるは、「いかに、御寢ならせられしか。雪おもしろく降りて、御庭の植木美しうなり候ふ。かゝる折、時雨の御茶屋に成らせられ候はゞ、さぞと存じ候ふ。」と申しければ、太閤目をさまされて、「いかにも、然るべし。手燭を點ずべし。」とて、寢衣の上に胴服を着せられて立出でらる。

新左衞門前に立ちて、庭の飛石を傳ひつゝ、時雨の茶屋に至り、折戸の此方より聲をかけて、「利休殿、只今これまで成らせられぬ。」と告ぐ。利休速かに答へて、折戸口まで迎へ奉り、御先に立ちて、植込の枝にかゝりたる雪を拂ひつゝ、圍の内に入れ奉るに、新左衞門もつゞきて入る。さるに、何時の間にか爐につぎたる炭は盛におこりて、釜の湯松風の音をたて、爐の内の薫物かをりて、早梅の香にあやまたれたり。新左衞門は案に相違して、この雪夜の深更によもやとおもひしに、さても油斷なき利休かなとあきれけり。かくて、利休は茶一服立てゝまゐらす。太閤も宵の宿酒なほ名殘あるところに、思ひがけ給はぬことなれば、常にまさりて賞せられけり。

新左衞門、今は我が策も空しくなりぬ何をかなしてと考へしが、かゝる深更に湯漬を命ぜられたらんには、利休もこれには困却すべしと案じつきて、太閤に申しけるは、夜もいたくふけぬれば、定めて御空腹におはしまさん。御湯漬を仰せ出されて然るべきか。」と申しければ、太閤「いかにも、然るべし」と仰せらる。

利休

利休かしこまりて、水屋に立ち、先に御迎に出でし時、植込になれる柚の實を二つ取りて袂に入れ來しを、その肉をるぐりとりて味噌をつめ、爐にて燒き、綿入服紗に包みたる飯櫃より飯を盛りて奉る。太閤、山海の珍味に飽かれたるところに、思ひがけぬ柚味噌を奉りたりしかば、殊の外御意に適はせられ、利休が職務の上に深く心を用ふることを喜び給ひて、加恩の御沙汰さへありけり。新左衞門も、今はせんかたなく、却て利休の職務に油斷なきことをいよ〳〵感じけりとなん。（說敎講錄）

一九　牧場の曉

杉村廣太郎

じやん〳〵〳〵と半鐘の音が霜夜に冴えて、如何にも氣たましく聞える。僕はがばと起きた。外面はまだ暗い。

（一）岩代國岩瀨の牧場。
（二）楚人冠と讀す。新聞記者。

昨夜湯に入つて、打寛いでしたゝか夕飯をたべた迄は覺えてゐるが、それから先は一瀉千里、唯一息に寐てしまつて、今始めて目が覺めた。此の鐘で愈、牧夫・耕夫が勢揃をして牧場の仕事を始めるのである。「行つて見ようではないか。」と、側に寐てゐた友の畫伯を促せば、寒さと睡たさに辟易して、「畫は想像でも書けるから、君だけ行つて來給へ。」とて起きようともしない、僕は艴然として手早く着物を改めて出た。實の所は、僕もその想像で行きたかつた。

眞黑な廊下を手探りで事務所の方へ出ると、此處の板間の中央に切つた圍爐裏を取圍んで、大きな男が二十人ほど立ちはだかつてゐる。赫々と起つた炭火の光に映る所を見

*謠曲「鉢木」の主人公。

ると、何れも脚絆・草鞋かひ〳〵しく穿きこんで、頭はすつぽりと頭巾で包んでゐる。腰には鳶口だか鎌だかやかましさうなものをぶつこんで、いかにも物々しい。

外の軒下には、同じ風體をした女が矢張二十人許り寒風に吹曝されて立つてゐる。折しもあれ、戛々たる馬蹄の響が遠くより傳はつて、二頭づつ繋いだ馬を片手に取りながら走せ來る人數が大分ある。中には、悠然と鞍壺に乘つて佐*野源左衞門尉常世唯今着到といふ見えのもある。霜白き曉の空、鏗々たる半鐘の音に連れて人馬の馳せ參ずる樣、戰場もかくやと勇ましげな牧場を、生優しい風流らしいものと心得て來た僕は少なからず面喰つた。

頓て一同集つたと見えて、頭領らしいのがそれ〴〵仕事と持場の割當を言渡す。言渡された者はそれ〴〵部署に就いて、八方へちり〴〵になつた。仕事は六時に始つて夕の四時か五時に終る。其の間二三時間毎に休憩時間を半鐘で知らせると、銘々其の持場々々で其の儘休む。子持の女などは、此の時を待兼ねて子供を連れて來させて、畑の眞中で乳を飲ませる。鐘の鳴ると同時に、母は子の方へ、子は負はれた儘母の方へ互に駈けよる樣如何にもいぢらしいさうな。持場といふのは色々ある。林を造る、木を樵る、垣を結ぶ、小屋を建てる、畑を耕す、草を刈る、馬を追ふ、牛を飼ふ。牛の病む時は病舍に牽いて行つて看とる。牡牛の出來過

ぎた時は不便ながら殺す。秣はライ・玉蜀黍の類を刻んで新鮮保藏として秣坑に貯へる。冬半にして池の氷が厚く張詰める時は、切つて氷室に貯へる。數へ立てれば盡くるを知らない。牧場の內に生を送るものだけが三百人に餘るといふ。

六時少し過ぎて夜は追々に明けはなれた。雪袴穿いて頰被した子供が三々五々連立つて出て來る。女の子もまじる。中には犬の子を連れてふざけちらして行くのもある。何處へ行くのかと聞けば、つい近くの學校へといふ。學校は九時に始るのだが、父母共に仕事に出た後、一人家に居てもつまらぬといふので、今から散々道草を食ひながら、三時

間ほどかゝつて行くのだといふ。大陸式の原野だけに子供までが、大陸式に出來てゐる。（ひとみの旅）

二〇　牧神の笛

三木羅風*

けん〳〵　ほろ〳〵、
けん　ほろり。
小山の小雉が
鳴くときに。

羊の神の
牧神（パン）は出て、

やさしい笛を
吹きならす。

日がな一日
吹きならす、
泉の娘は
なぜ見えぬ。

牧神は悲しうて、
さびしうて。（童謠民謠詩選集）

二一　四季の月

石川依平

うめ咲くそのに　かすみつゝ
みねのさくらの　はなぐもり、
くもりもはてぬ　おぼろ夜の
つきこそはるの　ひかりなれ。

ほとゝぎす、
まくらより、
つきかげに、
あかすなり。

まだしきほどの
はつね待つ夜の
馴れてすゞしき
ねやの戸さゝで

(一)徳川時代の歌人。安政六年歿す。

(二)照りもせず曇りも果てぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき。

(三)今朝きなきいまだ旅なる時鳥まだしきほどの聲なきかばや。

きりの葉わけに　かげ見えて、
あきとほのめく　ゆふべより、
立ちまち、居待ち、　待ちとりて、
いく夜かつきを　ながめけん。

木の葉ふりしく　やまのはの、
しぐれにくもり、　しもにさえ、
ゆきに照りそふ　つきかげを、
などすさまじと　おもふべき。

（續日本歌學全書）

二二　二宮尊德の訓言

福住正兄*

*二宮尊德の高弟箱根湯本の人。

川久保民次郎といふものあり、二宮翁の親戚なれども、貧にして翁の僕たり。國に歸らんとして暇を乞ふ。翁曰く、「夫、空腹なる時、他にゆきて「一飯をたまはれ。予庭をはかん。」と云ふとも、決して一飯を振舞ふ者あるべからず。空腹をこらへて、まづ庭を掃かば、或は一飯にありつく事あるべし。是己れを捨てゝ人に隨ふ道にして、百事窮しても又通ずべき道なり。我若年始めて家を持ちし時、一枚の鍬損じたり。隣家に行きて鍬をかし給はれといひしに、隣翁曰く、「今此の畑を耕し菜を蒔かんとする所なり。蒔き終らざれば貸し難し。」といへり。「我家に歸りても別に爲すべき業なし。依りて、此の畑を耕して進ずべし。」と云ひて、耕し、「菜の種を出さ

れよ。序に蒔きて進ぜん。」と云ひて、蒔きしに、隣翁喜びて鍬を貸し、なほ曰く、「鍬に限らず、何にても差支の事あらば、遠慮なく申されよ、必ず用立つべし。」といひし事ありき。斯の如くすれば、百事差支なきものなり。

二宮尊德

「汝國に歸り、新に一家を持たば、必ずこの心得あるべし。又、汝今壯年なり。終夜いねずとも障なかるべし。夜々寢ぬる暇を勵まし勤めて、草鞋一足或は二足を作り、明日開拓場に持出し、草鞋の切れ破れたる者に與へんに、受くる人禮せざらんとも、もと寢ぬる暇にて作りたるなれば、其の分なり。禮を云ふ人あれば、それ

だけの德なり。又、一錢・半錢を以て應ずる者あれば、是又一きはの益なり。能く此の理を感銘し、連日おこたらずば、何ぞ志の貫かざる理あらんや。われ幼少の時の勤、此の外にあらず。肝に銘じて忘るべからず。」と。

翁曰く、「世の中は今事無しといへども、時に變なき能はず。これ恐るべきの第一なり。變ありといへども、これを補ふ道あれば、變なきに等し。變ありて補ふこと能はざれば、大變に至る。古語に『三年の貯蓄なきは國にあらず。』といへり。兵隊ありといへども、武具・軍用備らざれば、すべきやうなし。家も亦然り。夫、萬づの事餘裕なければ、家を保つこと能はず。然るを況や家・天下をや。人は、予が敎を儉約を專らとするものといへど、儉約を專らとするにあらず、變に備へんが爲なり。人は、予が道を積財を勤むるものといへど、積財をつとむるにあらず、人を救ひ世を開かんが爲なり。」と。

報德二宮神社

翁曰く、「禍福といふものは二つあるにあらず、元來一つなり。近く譬ふれば、庖丁を以て大根を切るときは福なり、指を切るときは禍なり。只物を切ると指を切るとの違のみ。それ庖丁は一なり。而して、指を切れば禍とし、大根を切れば福とす。されば、禍福といふも人

事の私にあらずや。水も亦然り。畔を立てゝ引けば、田地を肥して、福なり、畔なくして引けば、肥土流れて、田地瘠せ、其の禍いふべからず。それ水は一なり。畔あれば福となり、畔なければ禍となる。富は人の欲する所なり。然れども、己が爲にするときは、禍之に隨ひ、世の爲にするときは、福之に伴ふ。財寶も亦然り。散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となる。これ人々の知らざるべからざる道理なり。」と。（二宮翁夜話）

（一）名は林次郎。評論家。文學博士。明治三十五年歿年三十二。
（二）靜岡縣伊豆國田方郡熱海町。

二三　わが袖の記

高山樗牛

熱海の冬

熱海のふた月はまことに樂しき、あはれ深き冬の暮なりき。よそならば吹雪にとぢられて、日影も薄き冬の眞中も、名にし負ふ暖かきところなれば、こちふく風も寒からず。むつきはじめの梅が香は、はやくも春を告げわたりて、野邊のやけあとの萌えそむるは、人の心もときめくころか。苫屋どもに岩海苔のかをれるもをかしく、蘆の屋に心細く立ちのぼる煙ものどかなり。

熱海全景

海原遠く見渡せば、相模・安房の山々雲か、霞か、すがたおもしろく、大島が根に立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし。初島わたり漕ぐふなうたの寄る波毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより渚をつたうて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ飛ぶさまもいとをかし。後には日金・十國の山々を負ひ、前には天空海濶の間に一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなか〳〵に及びがたし。

三保の春

松風遠く吹合はせて、波の音もかすかなる、物思まさる夕なりき。われひとり清見が關の宿を立出でて三保の松原に

(一)伊豆列島の一。
(二)箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ。（源實朝）
(三)熱海の東南海上三里にある島。
(四)熱海町の南端の岬。

遊ぶ。入日の影は雲にのみ殘りて月未だ上らず。田子の浦曲の夕なぎに、千鳥の聲もいと稀なり。江尻・清水をはや過ぎて龍華寺の輪塔を右手に見る。袂に寒き山風に、入相の鐘を吹送りて、初春のあはれ一入深し。三保に辿り着ける頃は、月やうやく上り、清見潟の水煙は闇路遙に立ちこめて、富士の高嶺に雪の色白し。見わたせば一帶の松林、木ぶかく生ひしげれるかな。

三保松原

木立の篩へる月のあかりに、殘んの雪の色冴えて、杜の下道

*駿河國安倍郡不二見村にある法華宗の寺。

杳かなる、霞に落つる影もなし。波の音やうやく近くして、われは羽衣の松に添うて立ちぬ。羽衣の松はわが年久しく思ひこがれしものなりき。「よしさらば、今宵は月と共にあかさんかな。」

松は早く枯れて、幹の朽ちたるが殘れり。そのもとにゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして今は見えわかず。「あはれ波の音と松風とのみぞ、今も昔にかはらざりける。」（人は文なり）

二四　人間の三等

福澤諭吉*

智愚強弱は樣々にして、上智と下愚と、至強と至弱とを比較すれば、同じ人類とは思はれざる程の相違あれども、社會の經濟上より見るときは、概して之を三等に分つ可し。

不具・癈疾の者は天然の不幸として之を除き、生來屈竟の身體にてありながら、何等の才能もなく、唯安閑として飲食し、甚だしきは放蕩無賴、常に他人の厄介となるのみか、動もすれば、他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。此等は最下等の人にして、社會全體の爲に謀れば此の種類の者は有害無益、俗に云ふ娑婆ふさぎの

福澤諭吉

*明治の先覺者。慶應大學の創立者。明治三十四年歿す。

邪魔者なれば、一人にても其の數の減ずるこそめでたけれ。

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母・兄弟と共に衣食するのみにて、曾て戸外の事に關せず、間接にも直接にも人に敎へたることなく、又相談に與りたることなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡して、老後・死後の謀を爲すに遑あらず、一軒の家を天地として生れて死するのみ。此の種類の人は、一國の良民として決して邪魔者には非ざれども、社會・人事の盛衰には關係薄くして、此の世にありて大に益するに非ず、無くて大に不自由を覺ゆるに非ず、先以て中の部類なり。

それより更に上りて、敎育の結果又は天賦の才力を以て活潑に立働き、一身・一家の獨立既に成りて、世間の累を爲さゞる上に、尙一歩を進めて、他人の相談相手と爲り、又、社會の利害を案じ、自ら自身の地位・才力を顧みて、能く事に當る可きを信じて、或は私に商賣・工業を企て、或は公に政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗敎・敎育の先導者となる等、一身の働を二分して、一は以て家に居り、一は以て世に處し、公私兩樣のために力を盡す者、これを最上等とす。

以上、三種三等の區別は、必ずしも其の人の貧富・貴賤のみによらず、時に或は富貴にして厄介なる者あり、貧賤にして調法なる人物あり。その子細を審かにして筆に記すは難き事なれども、事實は明白にして、世人の常に知る所なり。例

へば、一町村・一郡・一縣に人の死亡することあらんに、之を傳聞して其の不幸を悲しむは人情の常なれども、之を悲しむと同時に、又、竊かに私語して、「何某の病死、誠に氣の毒なれども、實は地方・遠近の爲に好き厄介拂なり。彼の親類・身寄にても先々安心ならん。」など云はるゝ者は下等なり。病死の報知に接して會葬したれども、不幸の沙汰は其の日限りにして、翌日より語る者もなきは、中等の人物なり。死亡の新聞に驚くは勿論、病中より樣々の噂に心配する折柄、いよいよ不幸を聞きて、其の地の人々まづ之を悲しみ、尋いで之を惜み、「此の人に去られては云々。」とて泣く者あり、狼狽する者あり、數年の久しき、尙人の口の端に殘りて消滅せざる者は上等なり。

されば、今、人が偶然にも此の世に生れ出でて、其の一身の行狀より、居家・處世の法に至るまでも、上等にするか、中等にするか、はた、下等に陷るか、其の上中下の差別は、必ずしも學者先生に質問するを要せず、近く其の地の人心の向背を觀察して、之を知るべし。社會は良師なりといふは、卽ちこの事なるべし。（福翁百話）

二五　旅順港口閉塞

聯合艦隊ハ去二*十六日再ビ旅順ニ向ヒ、同二十七日午前三時三十分敵港閉塞ヲ決行セリ。四隻ノ閉塞隊ハ驅逐隊及

*明治三十七年三月。

ビ水雷艇隊掩護ノ下ニ旅順口港外ニ達シ敵ノ探海燈ノ照射ヲ冒シテ港口ニ直進シ、約二海里ニ達スル頃敵ノ發見スル所トナリ、兩岸ノ要塞及ビ哨艇ヨリ猛烈ナル砲火ヲ受ケシモ、之ニ屈セズ、四隻相次イデ港口水道ニ闖入シ、第一ノ千代丸ハ黃金山ノ西側ニ於テ海岸ヨリ約半鏈ノ所ニ投錨爆沈シ、第二ノ福井丸ハ千代丸ノ左側ヲ過ギテ少シク前方ニ進ミ投錨セントスル時、敵驅逐艦ヨリノ魚形水雷一發命中シ、次イデ其ノ位置ニ爆發沈沒シ、第三ノ彌彥丸モ福井丸ノ左側ニ出デ、投錨爆沈セリ。第四ノ米山丸ハ稍後レテ港口ニ達シ、敵ノ一驅逐艦ノ船尾ニ衝突シナガラ、既ニ沈沒セル千代丸ト福井丸トノ間ヲ通過シ、水道ノ中央ニ投錨セシ時、敵ノ魚形水雷一發ヲ受ケ爆發シ、惰力ノ爲左岸ニ近ク船首ヲ左ニシテ横ニ沈沒セリ。敵ノ猛烈ナル砲火ノ下ニ於テ、斯ノ如ク閉塞船ガ勇敢沈着、其ノ任務ヲ遂行シタルハ、事業トシテ間然スル所ナク、誠ニ賞讃スルニ餘アリ。唯遺憾ナルハ彌彥丸ト米山丸トノ間ニ尙空隙ヲ存シ、完全ニ通路ヲ閉塞スルヲ得ザリシ一事ナリトス。此ノ壯烈ナル閉塞ノ再擧ハ、前回之ニ從事シタル勇士ノ切願ヲ容レ、將校及ビ機關士ハ主トシテ前回ノ者ヲシテ之ニ

廣瀨中佐銅像

任ゼシメ、下士以下ノミハ新志願者ヲ以テ交代セシメタリ。

（中略）

戰死者中福井丸ノ廣瀨中佐及ビ杉野兵曹長ノ最期ハ頗ル壯烈ニシテ、同船ノ投錨セントスルヤ、杉野兵曹長ハ爆發藥ニ點火スル爲船艙ニ下リシガ、敵ノ魚形水雷命中シタルヲ以テ、遂ニ戰死セルモノヽ如ク、廣瀨中佐ハ乘員ヲ端舟ニ乘移ラシメ、杉野兵曹長ノ見當ラザル爲、自ラ三度船内ヲ搜索シタルモ、船體次第ニ沈沒シ、海水上甲板ニ達セルヲ以テ、止ムヲ得ズ端舟ニ下リ、本船ヲ離レ、敵彈ノ下ヲ退却セルガ、其ノ際、一巨彈中佐ノ頭部ヲ擊チ、中佐ノ體ハ一片ノ肉塊ヲ艇内ニ殘シテ海中ニ墜落シタルナリ。中佐ハ平時ニ於テモ常ニ軍人ノ龜鑑タルノミナラズ、其ノ最期ニ於テモ萬世不滅ノ好鑑ヲ殘セルモノト謂ツツベシ。（下略）（官報）

二六　極地の探檢

極地探檢、これ近代の一大事業なり。遠く本源を尋ぬれば、極地の探檢は最初營利的より起りて、後に學術的となれるなり。大昔の事は暫くおき、我が戰國時代の前より、葡萄牙人は亞非利加の南端なる喜望峰を廻りて東洋に出づる航路を發見し、盛に印度と交易せり。英國人は之を觀て、更に一層便利なる近路を求めて彼等に鼻あかせんとて、こゝに極地の航海に力を用ひそめたり。げに、地球儀にて見る如

く、歐羅巴より東洋に至らんには、喜望峰を廻らんより直ちに北氷洋をつきぬくる方遙かに航路短ければなり。鯨は北海に多く住めるが、その何れの邊に最も多く住めるかを探究するも、亦目的の一なりき。已にして、北極航路の困難にして實用に適せざることを知るに及びて、目的は變じて、學術的となり專ら氣象・磁石力・陸地の分布、動植物等の調査をなすに至りぬ。

極地は、嚴密にいへば極圈以内なり。北極圈は吾が千島の占守より直徑約五百里にして、これより北極點に至るには、更に直徑八百里なり。占守の嚴寒・氷雪、交通の不便、食料の不自由等を聞けば、そこに移住せる人たちの上を思ひやるだに涙の種ならずや。まして、極地のことなれば、風雪の險惡なる、固より筆舌のよく及ぶところに非ざるべし。無數の大氷塊は海を蔽ひて流れ來る。熟練なる船員は右に避け左にかはし、つとめて衝突を防ぐといへども、氷塊に挾まるゝときは、船は大抵押しつぶさる。一日の行程僅かに一哩餘に過ぎざることあり。或は氷雪に閉ぢられて進退こに谷り、氷の中に穴を掘りて、その内に數月を送ること少なからず。かゝる間に、限ある食料は盡き、或は久しく果物・野菜を食せざるため壞血病に罹り、一隊の勇士枕を竝べて氷海孤島の中に死することあり。有名なるフランクリン*探檢隊の全滅も亦かくありしなり。往年、丁抹人ブレンル

*1786--1847

ンドが飢寒の爲に死せし時、最後の日記には左の如く記しありき。

余は北緯七十九度に於て次第に缺けゆく月の下に死す。余が足は凍り、四邊は暗し。行くこと能はず。二友の屍はこの灣の中央にあり。

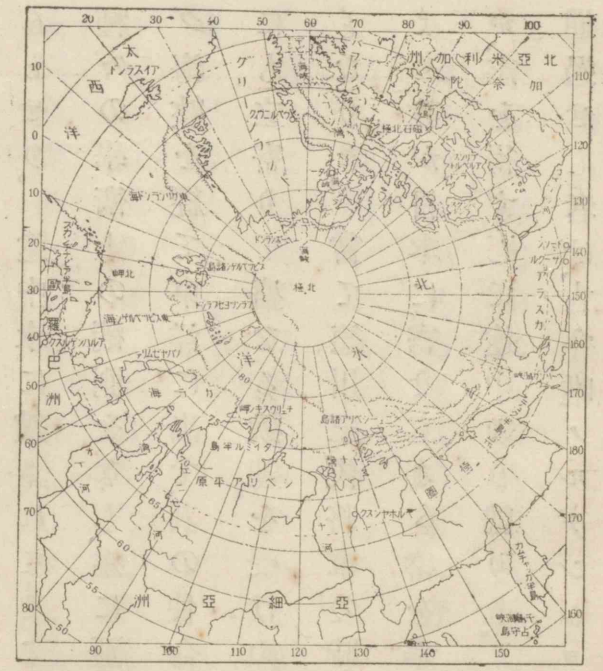
學術のため、國家の名譽のためとはいひながら、何ぞそれ最期の悲慘なるや。

かゝる困難の中に、非常の大功を立て世界の賞讃を博せし豪傑亦少なからず。茲にその二三を紹介せん。第一はノルデンショールド、第二はナンセン博士、第三はベヤリー大佐なり。

ノルデンショールドは鑛物學者にして、瑞典國より派遣したる探檢家なり。彼は亞細亞の北を通過して東洋に出でんとせり。途中氷に鎖されてそこに越年せしかど、その間種々の學術上の觀測をなし、遂に亞細亞の東なるベーリング海峽を經て東洋に出で、其の使命を果しぬ。歸途我が國にも立寄りて盛なる歡迎を受けぬ。こは明治十三年のことなりき。嘗て德川三代將軍の時、英國の一探檢家は、國王より我が日本に寄せらるゝ書を奉じて、同じ航路に就きしが、志を得ずして途中より歸りき。かくて、此の航路全部を通過せし者は、古今唯ノルデンショールドあるのみ。

ナンセン博士は諸威の動物學者なり。ベヤリー大佐はも

と米國の土木技師なりき。北亞米利加の東北にグリーンランドありて、大部分極圏の中にあり。この陸地は島なりや、或は北極まで續ける大陸なりや、また、その内部は如何なる有樣なるか、近頃までは全く世に知られざりき。明治二十一年、ナンセンはこの陸地の東岸より西岸に向つて横斷し、内部は一帶の氷高原にして、人の住居に適せざるを報告せり。つい



で、ペヤリー大佐はこの陸地の北部を横斷せり。彼は高原の北端より東岸に達し、海拔四千尺の氷の崖の上に立ち、四方をきつと見渡すに、洶涌たる氷海は東より北に周りて、此の陸の北極に接せざることを發見せり。その時の心地、いかに雄快なりしぞや。ペヤリー夫人はこの遠征に同伴して、途中良人の病を看護し、遂に偉功を成さしめたり。

この後、ナンセン博士は、流氷の北極點附近を通過すべき經路を考へ、之を利用して北極に至らんと期せり。明治二十六年、彼は堅牢なる一種の船を造り、古來探檢家の大敵とせる流氷に乘じて極海に漂流すること凡そ一年半、流氷が稍北極に遠ざからんとするを見るや、決然として船を捨てゝ

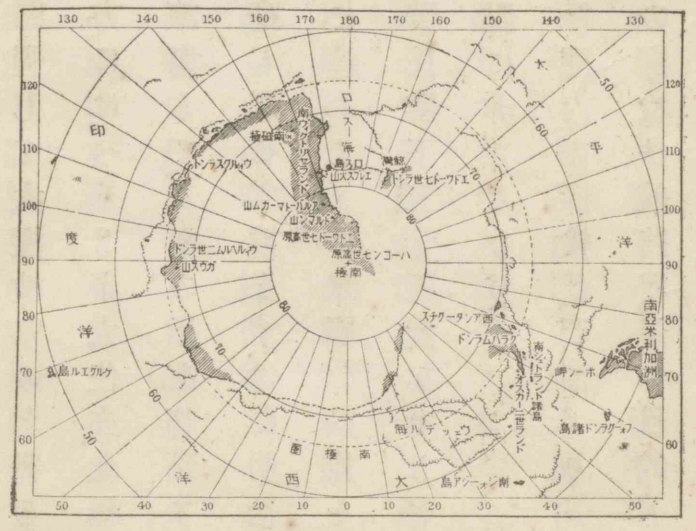
上陸し、橇によりて北極に向ひぬ。彼はいかにして再び歸るべき。大膽といふも餘りありといふべし。彼は、行けども行けども高低凹凸の氷原にして、恰も滄海の大浪が其まま凍りつきたらんやうなるを見て、只荷物の積卸しに年を重ぬべきを念ひ、慨然として歸途に就きぬ。かくて、或時は流氷に乘り、或時は革船に乘り、千辛萬苦の後、とある島に着き、料らず英國の探檢家ジャクソンに逢ひ、ジャクソンが小屋に伴はれて溫き待遇を受けたり。ジャクソンが日記に、小屋にて湯と石鹼とを與へて身體を洗はしめしに、三年の垢と脂肪とは容易に落ちず、數回ナイフにてこそげ落して、少しく清潔になりたり。

と記せり。其の勞苦想ふべし。かくて、ナンセン博士は遂に歸國して大探檢家の名譽を得たり。

一方には、ペヤリー大佐亦北極點を志し、遠征數回、その間、兩足凍傷して、八本の指を切斷するに至れり。然れども、大佐は毫も屈せず撓まず、遂に明治四十二年四月六日を以て北極に達し、こゝに米國の國旗を立てたり。この時最低溫度は華氏零下三十三度なりきといふ。蓋し、北極は極地の最寒點に非ざるなり。

南極圏内の探檢は明治より凡そ百年ばかり前に始れり。この探檢は航路發見を目的とせず、たゞ捕鯨家の副事業と純粹なる學術的觀測とに基づけり。近代の事なればにや、

悲慘なる遭難の事實は北極地方の如く多からざれど、暴風雪は南極の一名物にして、其の他、内地凹凸の多き等、探檢を困難にする事情少なからず。この中にありて能く探檢家を歡迎し、遠征の勞苦を忘れしむる氣樂者あり、名をペンギン鳥といふ。この鳥身長四尺ばかり、翼短く、兩足を以て直立して雪中を歩むさま、頗る人間に似たり。各群中に王あり。一群皆王の後



に隨つて列を成し、人間の來るに逢へば、歩を止め、首を屈して敬禮し、それより人語の如き調子もて長々と呟くこと、恰も歡迎演說をするが如しといふ。南極探檢家の中にて、最も著しき功を收めたるは近時の英人シャックルトン大尉と同スコット大佐となり。大尉は四十二年南極を距ること僅かに五十里の點に達せしが、食料盡きて引返しぬ。四十三年スコット大佐更に探檢の途に上り、必ず南極に至らんことを期し、英國皇后陛下は爲に國旗を親授し給ひしに、不幸にして志を遂げず、空しく極地の鬼となりしは惜むべし。大正三年シャックルトンは南極大陸の最も狹き部分を横斷せんとして成功せざりしが、これによりて未知の

新陸地發見せられたり。吾が國に白*瀨輜重兵中尉あり。早くより極地探檢の志を抱き、身を寒地の氷雪にならしつゝありしが、ペヤリー大佐の成功を聞き、又、スコット大佐の大志を聞きて、雄心勃々禁じ難く、匆々遠征の途に上りたりき。然るに準備の十分ならざりし爲に、豫期せしほどの功を收むるに至らざりしは洵に遺憾なりき。若し、完全なる準備と非常なる忍耐とを以てその志を繼ぎ、更に探檢を行ふものあらば、終に終局の目的を達せんこと亦難きにあらざるべし。

*名は義。

二七　夜半の時雨

村田春海(一)

なか〳〵に、友と聞くこそあはれなれ、
寐覺がちなる夜半の時雨を。

橘千蔭(二)

風の音聞かん便に植ゑし荻、
おもひの外に人招きけり。

香川景樹(三)

埋火のにほふあたりは長閑にて、
昔がたりも春めきにけり。

橘曙覽(四)

いとまなのたぶせの賤がなりはひや、

(一)江戸の國學者。文化八年歿す。
(二)江戸の國學者。文化五年歿す。
(三)京都の歌人。天保十四年歿す
(四)福井の歌人。明治元年歿す。

晝は茅かり夜は繩なひ。　井上文雄(一)

冬枯の垣根に纏ふうめもどき、
あさりつくしてひえどりの啼く。　熊谷直好(二)

疾く遲く、皆わがやどに聞ゆなり、
ところ〴〵のいりあひの鐘。　安藤野雁(三)

ゐのころは多くの子供もたりけり、
母のむなちの足らぬばかりに。

(一) 江戸の國學者。明治四年歿す。
(二) 大阪の歌人。文久二年歿す。
(三) 江戸の歌人。明治二年歿す。

二八　砂丘

吉江弧雁*

早春の日の光が障子の腰ガラスを透して、敷布の端へ白く射して居る。

終夜雨と風とでがたびし雨戸の鳴るのが胸にこたへて、眠られなかつた頭は、ぼんやりして立ち上る元氣も無い。心臟はまだ昨夜の嵐が深く喰ひ入つて居て、不安な鼓動を立てゝ居る。

先刻婆やが階下から來て雨戸をあけて行つたのも、ことゝ一段づゝ間を置いて階下を降りて行つたのも、夢のやうに頭に殘つてゐる。肘を立て身を起して、頭を上げて見ると、ガラス越しに、立ちつゞいてゐる人家の屋根の向ふに、

*名は喬松。佛蘭西文學者。

一列の杉林が目に入る。其の上に頂の白く光つて居る雲――春のしるしの雲が、もや〳〵涌き立つても無〳〵、靡くでも無く群をなしてゐる。日の光が落ちて、欅や榎の落葉樹の枝が、細かく光を見せて居る。鶯の聲が近く聞えて來る。

動亂の後の休息の姿、靜かな柔かな心持になつて、心臟の鼓動が靜まつて來る。と、體が急に疲れ出て、崩れるやうに又身を沈めて、後頭部へ枕をあてゝ、うつら〳〵天井を見て居た。

長押の上に掛けてある「海」は、濃い碧色を光らせて、岸上の茶褐色の岩にぶつかつて來る。高い地平線上の薄紫色をした空が、如何にも春の暮方を思はせる。大きな自然の姿を

此の小さな額面に縮めて、色と響と調子とを得て來た若い畫家の此の畫は靜かな、とろけるやうな早春の樹の空氣の中に、鳴りを立てゝ居るやうに思はれる。

「海へでも行つて見ようか、自在に波の伸びて流れる海岸へでも行つて見ようか。」と思つて居ると、波打際に並び立つてゐる眞白な砂丘の姿が見えて來る。松林の續いて居る砂山の中に、埋れて立つて居る白堊の病院の窓から遠く眺めた相模の海、死期の近づいた詩*人が、冷く澄んだ眼を上げて、「どれ私にももう一度見せてくれ。」と云つて、痩せた體を無理に起して、鐵製のベッドの緣にもたれて見やつた海の色。其の時の有樣が思ひ出される。

*國木田獨歩。

何處へでも、最も手近な海岸へ、そして砂丘の上へ身を投げ出して、暖かい日の光に照らされたい。

急に元氣づいて、私は臥床から起き上つた。障子を開けると、柔かだけれども、光を包んだ日の色が眩しいばかりに、人家の屋根から家の側を通つて居る街道から、一面に照り渡つて、薄白く地氣が立ちのぼる。

二時間の後私は都會から東へ走る汽車の車室の一隅に身を置いた。外套の襟を立てゝ、兩手をポケットへ入れたまま、車窓に顔を押し當てゝ、じつと外面を見つめてゐた。

枯田の刈株も、寸の伸びた麥畑の麥も、とび〳〵に立つてゐる榛の木林も、其先の小さな村落も、光を浴びて眠つて居る。

地平線上には、薄靄がかゝつて居て、一處は高く空の半ばまでも立ち登つて居るが、大方は天の裾を繞つて、消えるでも無く一層濃くなるでも無くもや〳〵してゐる。

遠くの松の森は、其の靄の裾から半ば顯れて、地上にしがみつくやうにして、村落の背後まで迫つてゐる。と、其の森の上に、雪を冠つた山の頂が、處々に何物かのしるしのやうに、微かに浮び出してゐる。

汽車の烟は斷續して枯田の上へ落ち、廣がり、這ひまはり、逃げまはり、薄く線となつて消えて行く。汽車は小さな驛々で、拾ふやうにして五六人づつを乘せて行つたが、南の方が開けて、心持の好い風が輕く吹いて來る明るい驛へ來て留

つた。

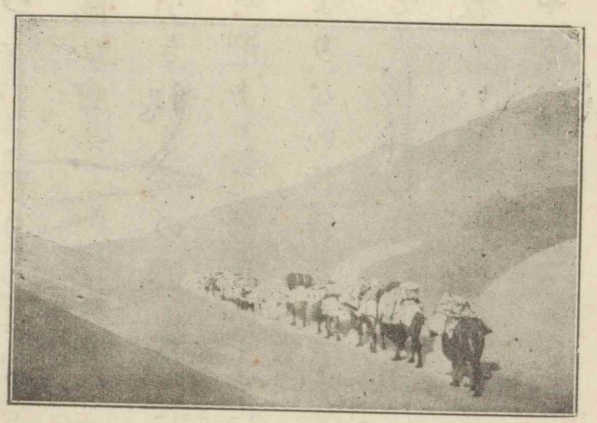
麥の生えて居る畑の間の平な一筋途を眞直に南へ向ふと、松林の向ふの空が低く垂れて、稍濃い色を見せて居る。私は其の方へ向つて行つた。松林越しに波が聞えるやうな氣がする。

松林の中から砂山の頂へと出た。

眼の下に碧い海が踊つて居る。爽かな風に氣分がすつきりして來る。思はず目をみはつて遠く見入らずには居られない。

彎曲して砂山の下へと迫つてゐる海は、今まさに、落潮の名殘惜しさうな響を立てゝ、手を伸し勢づけて、強ひても砂丘

の裾へ縋り付かうとするが、大きな力に引かれて、次第に其の胸を顯して來る。



砂丘

眞晝の光線は、白銀を溶かしたやうに、湧き返す波に照りつけてゐる。波打際に殘つた淺綠の藻草の帶は、砂丘の麓を走つてゐる眞白な貝殼の細い道と並行して、砂丘の陰に隱れつ現れつ、何處までも何處までも續いて居る。

眞白な翼をした海鳥の群が、右から左へ、左から右へ、五六十羽づつ長く舞つて行くが、先頭の

一つが何か見出したのか、急に波の中へ舞ひ下りると、後がつゞいて下りる。ばさ〳〵羽叩きをして、波と翼と光とが亂れ會ふ。

引き行く波の響の外には、何も耳に這入らない。じつと耳を澄まして砂丘の上に立つて居ると、かさつと如何にもたよりない物音がする。又間を置いて同じ物音がする。見ると、松林の中の貝塚へ來て、一羽の鳥が何か探して居る寂しい物音だ。白い物の響、白骨の洞（ホラ）の中で搖れて打會ふやうな響。

引く波はもう遠く〳〵、眞白にまろんで去り行くまゝに、白い柔かな手を幾本も出して、招き、悶えてゐるが、及ばずに其

山ハ青空ニ負カラ」

套を透すまでに感じられた。其の暖かみが全身に傳つて、身内が融けるやうな心持になつた。日が頸筋から照りつけて、毛穴から血管までも射し込んで行く樣な氣がする。私は何となく先刻見た不思議な人間の心持が次第に解せられて來るやうに思はれた。靴の尖で砂を掘つて、膝まで埋めて見た。細かな砂が、靴下の間からむづがゆく足をそる。そゝられるまゝ、一層深く埋めて見る。手で砂を搔いて居ると、何處までも、何處までも、掘つて見たくなる、——二時間以上も砂の中に埋まつてゐた。

海の響は遠くから又次第に寄せて來た、歸りを急ぐものゝやうに、見捨てゝ逃げた我が領土を取返す時の來たものゝ

やうに、新興の勢を以て寄せて來た。

砂丘の中腹の枯草は待受けたものを迎ふる如く、悅びに搖れ動き、砂丘自身すら響を傳へ、震動を傳へて動くかと思はれた。私は兩手で顎を支へて、寄せ來る波頭をじつと見つめてゐた。今私の胸には地を傳つて、海の響がかすかに搖れて居る。心臟の鼓動は又波の響と共に調子を合せてゐる。

私は暫く身內の波の音に耳を傾けてゐたが、恐しくなつて、身を起して、砂を拂つて道を歩き出した。

砂丘はやがて盡きて、私は程なく或小さな漁村に這入つて行つた。（砂丘）

二九　春が來た

永井荷風[二]

全體に氣候の寒い西洋では、毎日剝がして行く綴曆の上に三月四月の文字を見てから、人は今か〳〵と春の來るのを待つて居るのに引換へて、日本の春は何の先觸もなく唐突に訪れて來て、其の歡迎の用意もせず、去年のまゝに冬籠してゐる吾等の心を狼狽せしめる。

二月三日の夜、木挽町[三]の川端に出て橋を渡りかけたが、四邊は何と無く薄明るくて、穩かに靜止した夜の水に映る兩側の人家の倒影（エイ）が、驚くばかり鮮明に認められ、道の泥濘（ヌカルミ）や橋板や捨石など、雨に濡れた凡てのものゝ表面が、銀器を艶消

(一) 名は壯吉。文學者。

(二) 東京市京橋區にある。

にしたやうに鈍く底光つて居る。遠くを望むと、夜を包んだ水蒸氣は普通に夜を顯す蒼い色の中に、多分の赤みを帶びてゐる爲であらう、妙に濁つた一種の紫色・紺色に近い色をして、河筋のゆがんだ柳や尖つた人家の屋根など、眼に入る凡ての物體の角張つた輪廓をば、一樣に優しく曲線の如く柔げて居る。下駄や車の音の耳に入るのも、近いものよりは何處か知れぬ遠い物が却て明かに澄んで聞えるやうな氣がする。風が無くて、手袋せぬ手先の、冷く無いばかりでは無い。私は夜全體の心持が、曇つた冬の夜とは全く違つてゐるのに氣がついて、仰ぐとも無く立止つて再び空を仰いで見ると、今まで知らずに居たが、私の丁度眞上、頻に動

の手もすぐに形を亂してしまふ。

こんな柔かな波が、何時か荒れ狂つて、岸に小砂を打ち上げ、積み上げ、今見るやうな丘を築いた事があるのか。陸と水との戰鬪に敗れて、海はもう打寄せる力も無く、落ち行き、引き行くばかりではあるまいか。

砂丘の上へ來てゐると、又茅*が崎の濱邊を思はずには居られない。あの連つてゐる幾つかの砂丘、一夜にして風に從つて、形を變へ、有り場處を更へ、大きな波の起伏常なき樣を見せてゐる砂丘、暗中に於ける其の砂の恐しい盲動を思ひながら、病室に呻吟してゐた詩人の最後を思はずには居られない。

*神奈川縣高座郡にある、東海道筋の小驛。

ぶん〳〵いふ物音がする。丘の麓の方を見ると、貝殻の道に沿うて、五條の長い綱の兩端を板に挾んで、二人の人が兩端で其の板をまはしてゐる。綱はぐる〳〵廻る毎に音を立てる。不意に何處からか二人の子供が飛出して來た眞黑な泥だらけな脚をして、何を目當てなのか、白い道の上を、二人で駈け比べでもするやうに、獨樂のやうに、よそ目も振らず走つて行く。何處までも〳〵、道の見えてゐるかぎり、呼吸も繼がず駈けて行く。

私は一つの砂丘を降りて、道を傳つて、又一つの砂丘の裾へ來て見た。砂丘の間を落ちて來る小川の、海へ注ぎ込む口近くに砂を深く掘つて、何か中にむく〳〵動いて居る。見るとぼろ〳〵な着物をそれも肩から脊中だけに引掛けて、腰から下は砂中に埋つたやうにして、日向ぼつこをしてゐる者がある。

枯草のやうな髪には砂がまみれついて、赤黑い頸が細く見えて居る。膝の間には、子供が二人うよ〳〵取縋つてゐる。顏は見えないが、兩手でしきりに其の二人の子供の頭を撫でたり、脊中を撫でたりしてゐるやうだ。其の中に、子供は何がをかしいのか、きやつ〳〵と笑ひ聲を高くして、足で砂を蹴飛ばしたり、手で掴んだりしてゐる。

見知らない者が背後へ來て立つたので、子供等は何か小聲でぶつ〳〵言つてゐたが、不意に其の者は振返つて顏を見

せた。髪が長く垂れて、其の下から大きな眼がぎよつと二つ光つてゐる。痩せた小さな顔は割合に鼻が大きく見える。何か言はうとするのか、下唇を妙にゆがめたが、其のまま固く食ひしめて、ふつと又向ふを向いて、前へゆがんだ。子供等の上へ、丁度母雞の雛を翼の下へ入れるやうに身を伏せてしまつた。

私は悪い事でもしたかのやうな氣がして、こそ〳〵砂路を急いで通り過ぎた。

五六町歩いて來ると、疲れを覺えたので、枯草の生えた砂丘の裾へ身を投げるやうにして、腰を下した。肘をついて身を伸すと、下の地肌から溫かみが、ぬく〳〵ほてるやうに外である。

鼠色した皮の上には白い斑點のある太い幹がびつしより濡れたまゝ乾かず、鼈甲のやうな艶を出して、右に左に地上に匐ふ如く長い枝を伸してゐたが、其の如何にも自由な放縱な曲線の美しさは言語の外であつた。

楓の根元には、去年野菊や薄を刈込んだ切株が、絹絲で繡ひ取りでもしたやうに際立つて、黑い土の上に綠の若芽を出してゐる。椿の硬い厚い葉は陶器の表面のやうに輝いて居る。梅の木は針のやうに尖つた枝の先に、其の色も其の大きさも丁度小豆の粒ほどの蕾を附けて居る。朝の雨に化粧した庭の樹木を仔細に見ると、空は曇つたまゝ薄暗い

のに、何處から漏れて來るとも知れぬ薄い日の光がぽつと流れ渡つた。冬であるならば、こんな薄い日の光では大きな家屋の影さへ描かれまいに、庭中の樹木は、すぐさま其の細い絲のやうな小枝の影までを、はつきりと殘りなく、濡れて平かな土の上へ横たへた。

見て居る中に、日の光は次第に強く明るくなるにつれ、濡れた土地は薪か何かで底の奥から燃やされるやうに、白い水蒸氣を立てゝ乾き始める。私は珍しい此の現象に愈興味を覺え、食事もせずに緣側に腰を下して、卷煙草に火を付けようとした。するとマッチは幾度すつても、何處から來るとも知れぬ風の爲に、煙草に火のつく間を待たず吹き消されてしまふ。私は頭を上げて訝しげに庭を見たが、細い楓の枝は少しも動かず、何れの樹木も一齊に如何にも大儀らしく靜止してゐるのである。漸くにして非常に高い樫の梢に常磐木の細かい葉が、日の光にちら〳〵して動搖して居るのを認めたばかり。私は掌をかざしてもう一度マッチを擦つて見ると、小さい焰は掌の蔭ながらに、矢張激しく動搖するので、私は始めて今朝の空氣全體が、風と名付けられて枝を動かすほどに強くはないけれども、如何にも廣く大きくゆるやかに動いて居るのだと心付いた。

嗚呼凡てのものがこんなに軟かく、こんなに優しく見えるのは、眼にも見えず、物にも動かされず、謹深い女の息のやう

に通ふ此の風の力であらう。

鶯は眼の前の楓の木に止つて、長い尾を敏活に振りながら、今は聲も惜しまず鳴き續ける。雀は庭中の枝に囀り、雞は何處か近くの家で頻に時を作つて居る。植込を隔てた勝手の井戸端では、高話しながら下女の笑ふ聲が如何にもたわいなく聞えると同時に、出入りの商人が開ける裏門の鈴の音、往來を通る物賣の笛、何處かで囃す遠い太鼓の響までがみな一緒になつて、空模樣の次第に晴れ、日の明るくなるにつれ、冬には聞かれぬ澄んだ強い響で耳に傳つて來るのである。けれども、私は不思議なほど、其等雜多の物音をば不調和に感じなかつた。恰も廣大な音樂堂で管絃樂が演

亂する雲の間に圓い小さい月が浮んでゐた。併しそれは光のある蒼い月では無く、白い一輪の環に過ぎず、其の面をば雲の往來するのがよく見える。雲は先刻より更に激しく、今までは空全體に渡つて、其の奥底から動亂し始めたので、折々は全く月の姿を隱してしまふ事もあつたが、不思議なのは、水溜りや濕つた捨石の銀色なす輝は、依然として曇らぬばりか、益、強くなる四邊の薄明るさに、丁度夏の黄昏に比ぶべく、幽暗の中に如何にも遠くが見透かされるので、私は始めて是が春の朧夜だ――月の光のみならずして、已に夜そのものが一種の光澤を持つてゐる春の朧夜であると感じた。

翌日、庭を隔てた隣家で障子をばた〳〵叩き始めたが、それは不思議なほど何時も聞くはたきの音とは違つて、如何にも輕く愉快である。冬の曇つた夕暮近く、外には木枯しの風と共に豆腐屋の呼聲のさまよふ時分、薄暗い部屋から隣のはたきの音を聞くのとは、何と云ふ相違であらう。

門外の往來を通る重い荷車の響が、穩かに遠くなつた時、私は軒先に囀る雀の聲の殊更に高く聞える中に、ふいと一聲、細い口笛のやうな、如何にも角の無い滑かな響を耳にした。鶯である。私は障子を開けて縁側に出た。明るい日光は縁外一面に輝いて居て、手水鉢の水と南天の黑い葉の面とに映ずる其の色は、氣のせゐばかりでは無く、事實何處かに言ふに言はれぬ黃金の光澤を含んでゐたが、併し私の聽かうと願つた鶯の聲は、一度とだえたきり、いくら待つて居てももう聞えなかつた。

寒い午後、雨の夕方、風の夜と日數は經つて、二月も忽ち末近くなる。或朝私は二聲も三聲も續けざまに鶯の鳴いてゐるのを聞いた。

すぐ起き出でて、顏を洗ひに縁側へ出た時、私が何より先に感じたのは、日頃の長雨にしつとりぬらされた庭面の土の色である。此の前始めて鶯を聽いた朝には、日光ばかりが春らしく輝いて居たけれども、庭の地面は冬中の霜で、見る影も無く燒けたゞれ、戰の切れたやうに割れて居る處さへ

庭の光景

あつた。それが今では幾夜の雨を十分に吸ひ込んで、恰も鍬で耕したやうに柔かく平かに落付いて、若し其の上を歩いたら、人の足をも埋めさうに思はれる。雀が幾羽となく飛び下りて、頻りに何か啄んでゐるので、私は人の目には見えない樣々の草の芽や蟲の卵がどれ程多く、濕つた此の土地の中に發生して居るかを想像した。

萬物の母たる土地が、斯くの如く穩かに休んでゐるので、其の上に生息して居る樹木は、何れも冬籠の寒氣に對する反抗的態度を改め、もう暴風に吹き倒される心配も無く易々と其の枝を伸したやうに思はれた。其の中に殊に優しく私の眼に映じたのは、庭の中央に立つてゐる大きな楓の木

奏される前、幾多の伶人が幾多の異つた樂器の調子をば、各自勝手に調べて居る時、其の不調和な響が演奏を待つて居る聽衆の心には、時として演奏される曲よりも却て深い空想を誘ふ、それと同じやうな心持がするのであつた。

今こそ冬は全く退却してしまつたのである。氣候が不順であるだけ、人の心には季節全體の變遷と云ふ事が動かし難く感じられて、「春」と云ふ文字が、大きく空に書いてあるやうな心持が、日にまし深く明らかになつて行くのである。

（荷風傑作鈔）

三〇　初雛を贈る

樋口一葉*

*名は夏子。小說家。明治二十九年歿す。

日毎に長閑になりまさり候。皆々樣いかゞ、御機嫌よう渡らせ給ふらんと存じあげ候。この程承り候へば、千代子樣、はや御高笑遊ばされ候とや。誠に物をひき延すやうにすく〳〵と御成長遊ばされ、さぞかし御樂みの御事なるべく、折々御噂申上げ候ては、御羨ましう存上候。この五人囃一組、御初節供の御祝のしるしばかりに差上候。御處々より色々きらびやかに參らせおはします御中へ、御恥かしくは候へども、お心安さに任せ、せめてもの心ばかりに候。裏庭の桃一枝、まだ蕾がちに候へども、添へて御覽に供へ候。御納め下されば候はゞ忝く存候。かしこ。（通俗書簡文）

三一　女子の同情

芳賀矢一

正月の元日には帚を使はぬ。帚は一年中、一日として休むひまがない、此の日だけは休ませるといふので、つまり帚に對する同情である。

毎年二月八日には、女子は針供養といふことをする。針の折れたのを集めて、淡島の社へ納め、一日絲針の業を休むのである。裁縫の業は、女子の平生の仕事であるから、毎日使つた針に對して、感謝の意をあらはす心持だらうと思ふ。

如月や若き女の針供養。

かく無生物にまで同情をするといふのは、誠にやさしい心

懸である。女子は此の心を以て召使や奉公人に接しなくてはならぬ。

觀音の三十三番の札所廻り、又は六十六部の打連れて行くのは、何となくあはれな、詩的な感を起させるものである。小さい娘の子の順禮姿などは、殊にさうである。御詠歌のあはれな調子につれて、野山を歩くのは、人の情を賴りとするのである。此等の人々の境遇には、色々な、物哀な物語が疊まれて居るかと思へば、若干の報謝を與へるのも、惜しくは思はれない。

然るに、田舍を旅行すると、處々の門戸に、「十年間諸事儉約。」「物貰入る事無用。」などと張出してあるのが目につく。諸事儉約は結構である。併し、人の情に縋つて旅する、あはれな順禮者などに向つて、些細な報謝が施されぬであらうか。儉約してといふ聲の下に、慈善といふ同情の心がせかれてしまふことがないであらうか。謠曲にあらはれた足利時代のやうに、行暮れた旅僧に、一夜の宿を貸すといふ接待まではなくとも、あはれな物乞に、少々の志を出す位の情はあつてもよいではあるまいか。特に同情を生命とするやさしい女子に於てさうであると思ふ。（日本人）

(一) 名は解、曲亭馬琴と號す。德川末期の小說家、嘉永元年歿す。文化文政

(二) 東京市麴町區に在る。

(三) 九段坂の西に並んだ坂。馬琴は當時此の坂の下に住んでゐた。

三二　根分の後の母子草

瀧澤馬琴

文政四年辛巳の春二月晦日の黃昏ごろ、飯田町の中坂に行

倒れたる老女ありとて、これを觀るもの堵の如し。この日、自身番屋に集ひ居たる當番の町役人等、定番人を遣はして、その體たらくを見せけるに、旅行くものと覺しくて、むげに老いさらぼひたるが、長途に疲れ、足痛みて、一歩も運ばしがたし。」といふなり。これによりて、町抱への者に背負はせて、やがて番屋に扶け入れて、事のやうを尋ぬれば、答へて曰く、「ばゞは奥州白河*の城下、中の町なる宮大工十藏が後家にして、名をしげと呼ばるゝもの、今年七十一歳になりぬ。夫十藏が世を去つてのち、十三箇年以前、文化六年の春、わが子源戸に在りといふ。いかでわが子の在所を尋ねて逢はゞや

*磐城國西白河郡白河町。

と思ひ定めしは、九箇年以前の事なりき。

かくて、文化十年の春の頃、陸奥よりあくがれ來て、江戸に留ること半年ばかり、四里四方の外、近郷まで月毎日毎に尋ねしかども、夢にだに逢ふよしなかりき。さては江戸にはあらざるならんと、やうやくにおもひかへして、愈、廻國の志念を堅うし、東山・西國、いへばさらなり、南海・北陸、おちもなく、凡そ六十六箇國の靈山・靈地を巡禮して、

馬琴

「過去には亡き人の菩提の爲、現在には命のうちにわが子に

めぐり逢はしめたまへ。」と念ずる外に、業もなし。乞食して行く旅なれば、人の情に遇ふ日は稀にて、露に宿り風に梳り、或時は、荒磯の浪風に吹きすさまれて、終夜夢も結ばず、又、或時は、深山路の雪に閉ぢられて、つく竹杖の節も屆かず、さまざまの艱苦を歷たれど、これまでは一度もやみ煩ひしことなく、旅寢すること九年に及べり。　今は既に巡り盡して、廻國すべき方もなければ、再び江戸を志して、木曾路を下り、甲斐が嶺を打廻り、よんべは二子の渡とかいふ川邊のあなたなる里に宿りつ。　さて、今日、江戸に來つるなり。　かゝりし程に、あの御坂の邊にて俄かに足の痛み出でて、一歩も運ばし難ければ、思はずも倒れ侍りき。」といふ。

*武藏國橘樹郡高津村。多摩川の渡。

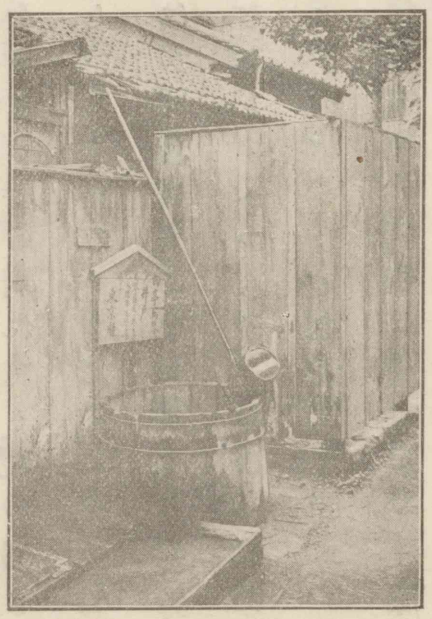
町役人等由を聞きて、「心地は如何に。」と尋ぬるに、「足の痛めるのみにして、心地は常に變らず。」と答ふ。「江戸に知る人ありや。」と問へば、「否、知る人とては侍らねど、八丁堀なる松平越中守樣は國屋敷にておはしますなり。　かしこへ送らせ給へ。」といふ。　これより前、その腰に附けたりし風呂敷包を解かせて見るに、九箇年以前、故郷を立ちいづる時、十藏・しげ等が菩提所なる何某寺より書いて與へし通り手形といふ證文一通あり。　濕風・塵埃に汚れけん、紙は茶をもて染めたるごとくいと古びたりけれども、その印章は疑ふべくもあらず。この他は、錢八百文と布のぼろとのみなりけり。　そのいふよしと寺手形とすでに吻合するをもて、番屋の奥の間に臥

*東京市京橋區にある。

さしめて、藥を與へ、且、夕餉をたうべさせなどす。

さる程に、日は暮れて、酉の初刻も過ぎたる頃、武家の中間とおぼしき男、自身番屋におとなひて、「やつがれ、さきに主用の使にたちて、こゝの中坂をよぎりしとき、行倒れたる老女を見たり。心に懸るよしもあれば、つばらに問はまほしかりしかど、火急の使なるをもて、時の後れんことの口惜しくて、思ひながらに打過ぎたり。今その歸るさなるにより、中坂にて人に問ひしに、番屋に扶け入れられて、こゝにありとぞいはれたる。その老女を見せ給へ。」といふ。

この時、しげはまどろみたるを、町役人ら呼びさまして、「そなたの由縁の人にやあらん、見まほしとて、只今來たり。對面せよ。」といふ程に、しげは忽ち起き直りて、「そはわが子源藏ならずや。やよ、そなたは源藏か。源藏に非ずや。」と、せはしく問ひつゝ這寄るを、町役人ら推しとゞめて、「さのみせきては事も分らず。心を鎭めて問へ。」といふ。その時、くだんの中間は燈火をさしむけて、とざまかうざまうち見つゝ、「わが母に似たれども、年あまた經たることなるに、いたく老衰したるをもて、定かにはいひがたし。」といふ。



九段中坂下馬寧舊宅址

町役人らこれを聞きて、「然りとも、かれ自ら奥州白河仲の町、大工十藏が後家、名はしげと告げたりし事の由分明なるに、をさなき時に別れても、親の名までを忘れはせじ。忘れやしつる。」と詰る。「さん候。その名に違ひはなけれども、世には又同名異人のなきにしも候はず、又、僞りて利を謀る者もなしとすべからず。身につけたりしそが中に、證據となるべき物などの候はずや。」と問ふ。町役人ら諸ひつゝ、かの手形を開きて見すれば、見つゝ小膝をはたと打つて、「わろくも疑ひつるものかな。わが母に相違候はず。」といふを、しげは聞きあへず、「然らば、そなたは源藏か。」「源藏にこそ候なれ。」と名のれば、しげは這ひまつはりて、抱きつゝ、「やよ、源藏よ。われに逢ひたい逢ひたいと思ふばかりに、九箇年このかた、日本國中うちめぐり、いくそばくの艱難苦勞も、願かなうて、うつせみの息の内なる今宵いま、逢ひみることのよろこばしさよ。やよ、源藏よ、顔を見せよ。そなたはをさなかりしとき、左の眼ぶちに腫物出できしその折に、眼の中へ針二本まで打たせしことあり。その針の痕今もあらん。こちらを向いて見せずや。」と口説きたてつゝ、また抱きしめて、涙は雨と降りそゝぐ、その歡はなか〳〵に譬ふるに物なかるべし。天地を拜み、町役人らを一人〳〵に伏拜む慈母の哀歡無量の恩愛（オンアイ）、今さら膽に銘じけん、源藏もはふり落つる涙を袖にせきかぬれば、人皆泣かぬはなかりけり。

「此の時のしげが有様は、和漢巨筆の稗官なりとも、寫しとらんこと易かるべからず、又、俳優の上手なるも、よくまねんことと難かるべし。」と、後にぞ人の評しける。（兎園小說）

六訂女子國語讀本卷四終

大正十四年二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

六訂女子國語讀本　全十册

初版	大正十四年二月十八日	大
再版	大正十四年二月二十日	大
三版	大正十四年九月十日	大
四版	大正十四年十一月十日	大
五版	大正十四年十二月十日	大
六版	大正十五年一月十日	大
七版	大正十五年二月十日	大
八版	大正十五年三月十日	大
九版	大正十五年四月十日	大
十版	大正十五年五月十日	大
十一版	大正十五年六月十日	大
十二版	大正十五年七月十日	大
十三版	大正十五年八月十日	大
十四版	大正十五年十二月十日	大
十五版	大正十六年一月十日	大
十六版	大正十六年二月十日	大
十七版	大正十六年三月十日	大
十八版	大正十六年四月十日	大
十九版	大正十四年二月九日	大
二十版	大正十四年二月二十日	大

刷印兼發行者　正訂

定價　卷一、二、五、六、七、八、九、十　各金參拾七錢　卷三、四　各金參拾九錢

昭和臨時三年度定價　卷一、二、五、六、七、八、九、十　各金六十一錢　卷三、四　各金六十五錢

不許複製

著作者　吉田彌平
同　小島政吉
同　篠田利英
同　岡田正美

印刷兼發行者　東京市神田區美土代町三丁目一番地　金港堂書籍株式會社

代表者　原安三郎

印刷所　東京市麴町區飯田町三丁目十番地　獅子吼堂印刷所

發賣所　東京市神田區美土代町三ノ一　金港堂書籍株式會社

賣捌所　各府縣特約販賣所